# 追憶の歌物語【二】

著者：紅月　萌
URL：http://eldorado666.blog.fc2.com/

# 第八章　封じられた

今回は少し、珍しい話をしてやろう。
レグルを離れてからしばらくの間、シリルの奴が旅の楽士の姿を追い求めてあちこちを旅して回ったことは、以前にも話したかの。国から国へ、町から町へ。旅を続けておれば、面白いことも嫌なこともある。色々なことがあったものじゃ。中には、少し人とは違う、珍しい経験をするようなこともの。
今から話すのは、そういった話の内の一つじゃ――。

シリルがその遺跡の噂を聞いたのは、ルーベンの片隅にある酒場だった。
ミドグリアの西の辺境にあるこの町は、現在ミドグリアと対立しているリンドとの間に設けられた不干渉地帯の更に少し手前にある。十年ほど前までは交通の要衝として賑わう比較的大きな町だったが、リンドに向かう街道が閉鎖された今では訪れる人も滅多にない。以前は旅人達で賑わっていたのであろうその酒場にも人の姿は少なく、シリルが訪れた時は常連客らしい数人の男だけが、言葉少なに夕食をとっていた。
活気のない店の雰囲気を気に留めることもなく、適当な椅子に腰を下ろして簡単な食事を注文する。食事を待っている間、ぼんやりとしていたシリルは、ふと視線を感じて顔を上げた。シリルの後からやってきたらしい商人風の男が、じっとこちらを見ている。
目が合うと、男はにっこりと微笑んで口を開いた。
「ここ、良いかい？」
気さくな口調で隣の席を指した男に、シリルは黙って頷いた。他にもたくさん席は空いているのに、と思わないでもない。だが、一人で食事をとることが苦手な人は、意外と多いものだ。といって、常連客の間には入りづらい。
手短に食事の注文を済ませると、男はシリルの方に向き直って口を開いた。三日月型に細められた目と目尻の皺が、人懐こい印象を与える。
「あんた、ツェリアの生まれだろう？」
「ええ」
男の問いに頷きながら、シリルは運ばれてきた夕食を口にした。この辺りでよく食べられる山鳥の煮込みだ。さして豪華な料理ではないが、一日の終わりに温かい料理を食べられることがもたらす安堵感は大きい。
「やっぱり。俺の親戚が、ツェリアの生まれなんだ」
嬉しそうにそう言う男を、口に含んだ肉を咀嚼しながら見返す。そう言われてみれば、男の髪の色は典型的なミドグリア人の赤毛よりも少し薄い。色素の薄いツェリア人の血が入っているためだろうか。
男がにこにこと他愛のない話を続ける隣で、シリルは黙々と食事を続けた。ほとんど相槌も打たないシリルに向かって、それでも男は話し続ける。その楽しそうな表情に、シリルはくすり、と笑った。もしかすると、一人での食事が苦手なのではなく、単に人恋しかったのかもしれない。

「あんた、これからどこへ向かうんだ？　まさかリンドに行くんじゃないんだろう？」
　男に問われて、シリルは少し返答に困った。決まった行き先がある訳じゃない。何の手がかりもないけれど、一人の女性を捜している、なんて、言われた相手も困惑するだろう。
「遺跡を見て回っているんです」
　適当に誤魔化すつもりで口にした言葉は、けれど、嘘ではなかった。ミドグリアにやって来て、既に一年余り。その間ずっと、シリルはアルキミアの歌に出てきた遺跡を求めてミドグリア中を回っていた。残念ながら、該当するような場所は今のところ見付かっていないけれど。
「この辺りで、遺跡がある場所をご存じないですか？」
　そう訊ねたのは、あくまで社交辞令だった。答えなど、期待してはいない。だから、男がまるで何か心当たりがあるかのように勢いよく顔を上げたのを見て、シリルは驚いて目を丸くした。
「何か……？」
「ああ……いや、すまん。そういえば、一つ変わった遺跡がある、と聞いていたのを思い出してな」
　男の答えは、けれど、妙に歯切れが悪い。
　これまでの饒舌さが嘘のような男の態度に、シリルは首を傾げた。そのまま下から男の表情を覗き込む。そんなシリルの態度に、男は苦笑に似た表情を浮かべた。大きく息を吐き、口を開く。
「リンドとの国境を越えてすぐの所に、奇妙な遺跡がある、という話を聞いたことがあるんだ」
　ちらり、とこちらを窺って、男は言葉を続けた。
「あんた、魔法使いだろう？　俺は魔法使いじゃないが、そのくらいのことは分かるんだ」
　そう言われて、ようやくシリルは彼が口ごもった理由を理解した。
　ミドグリアと緊張関係にあるとされているリンドは、また、魔法使いに排他的な国として知られている。元々研ぎ澄まされた剣術を好む質実剛健な気風の国であり、魔法使いもほとんどいなかったらしい。だが、その風潮はこの十年ほどの間に異様なほど過激化していた。今では、魔法使いの入国は一切禁止されているという。
　普通なら、魔法使いの纏う魔力に気付くことが出来るのは、同じ魔法使いだけなのだけれど。男がシリルの魔力に気付いたのは、彼自身がたまたま魔力を持って生まれついたためだろう。魔力を持って生まれた人間の全てが、魔法使いになるわけではない。かつてのシリルのように、魔力を持っていることにすら気付かれない地域もあれば、魔力を持っていることが分かっていて、魔法使いにならないことを選ぶ人もいる。そういった人達の大半は、魔力を持たないただの人間と変わらないが、中にはこの男のように他者の纏う魔力を感じ取れる者もいる。
「リンドですか……」
　呟いたシリルに、男は大きく肩を竦めて見せた。
「行く気じゃないだろうな？　やめとけよ。魔法使いには異様に厳しいぞ、あの国」
　諭すような口調でそう言った男に、シリルはただ曖昧に笑って見せた。

「なるほど、ね」
確かにこれは、「異様に厳しい」かもしれない。
背に生やした魔法の羽根をばさり、と羽ばたかせてシリルはその場を旋回した。
ルーベンの酒場で遺跡の話を聞いた翌朝、まだ誰も起きてこない早朝のうちにシリルはリンドに向けて出発した。空を飛んだのは一応の用心のつもりだったが、正解だったかもしれない。不干渉地帯を抜けた先の国境でシリルが目にしたのは、国境を警備する軍隊でもなければ侵入者を警戒して設けられた櫓でもなかった。むしろ、国境は平和そのものだ。ミドグリアとの対立、という言葉を疑いたくなってしまうほど。
だが、その一方で。国境づたいの壁にほどこされているのは、おびただしい数の退魔の文様。
「一体、何があったんだろう……？」
魔法使いに厳しい、とは聞いていた。けれどシリルは、質実剛健な気風のリンドでは、まるで簡単に自然の姿を歪めることが出来る魔法に対して反発が強いのだろう、くらいにしか考えていなかったのだ。更には隣国との対立が続き、魔法に対する反発が過激な物にまでなってしまったのだろう、と。
だが、これはもう、そういうレベルの話じゃない。
ひどく厳重な退魔の壁は、強い魔力を纏う者を拒むものだ。その魔法使いが持つ魔力が強ければ強いほど、無理にこの壁を通ろうとしたら無事では済まないだろう。もしかすると、五体がバラバラに砕けてしまうかもしれない。
あからさまな警戒、あるいは警告。――一体、誰に対して？
ミドグリアに対して、とは思えない。確かにここはミドグリアとの国境だし、ミドグリアの軍は、少なくとも一年ほど前までは魔法の軍事転用を当たり前のように行ってきていた。けれどそれでも、ミドグリアの軍の主力は魔法ではなくあくまで兵力だし、そもそも、ミドグリアの魔法はそれほど進んでいるわけでもない。そして、魔法使いでさえなければこのくらいの壁を越えることは容易だろう。そう高い城壁でもなければ、警備が厚いわけでもない。
魔法使いだけに特化された城壁。まるで、ルチアの優秀な魔法使いが束でかかってくることを想定しているような――あるいは、上級妖魔の襲撃に備えるかのような。
ばさり、と翼を打ち鳴らし、退魔の効力が及ぶ限界まで近付いてみる。そうしたところで、シリルは一つのことに気付いて眉を顰めた。城壁も退魔の文様も、よく見てみれば驚くほどに古い。歳月によって部分的に退色し、風化したそれは、まるで遺跡だ。
しかし、また一方で、この城壁は明らかに遺跡ではなかった。遺跡に施された魔法は、そのいずれも流れ去った長い年月によって四散し、力を留めては居ない。だが、この国境に施された魔法は今でも生きていた。きっと、太古の魔法の跡に同じ魔法を重ねたのだろう。
けれど。
「この国には、ホントに魔法使いがいないんだろうな」
形ある物に刻まれた魔法は、それを使う者が魔力を持つことまでは必要としないことが多い。この退魔の文様が刻まれた城壁も、その手の魔法のようだ。形をなぞれば、効力だけは充分

に発揮される。
「でも、使う人間がその力をきちんと理解してなかったら、どんな力にも意味はない」
師匠の口癖だった言葉を呟いて、シリルは思わず苦笑した。かつては、自分が毎日のように言われていた言葉だ。
国境の手前に降り立つと、魔法の翼を畳む。そうしておいて、シリルは短く呪文を唱えた。目に見えない膜に、身体がぴったりと覆われるような心地に襲われる。と同時に纏う魔力がすぅっと消えるのを確認して、シリルは満足そうな笑みを口元に浮かべた。
魔封じの呪文は他者の魔法を押さえ込む用途で使われることが多い魔法だが、自分に対して使うことも出来ない訳じゃない。魔力を封じてしまえば、魔法使いだってただの人間だ。魔法は使えなくなる代わり、退魔の魔法に影響されることもない。
常に周囲に感じていた魔力が感じられないのは、正直、かなり心許ない。こんな時はつくづく、自分が魔法に頼り切っていることを実感してしまう。そんなこと、いまさら言ったって仕方ないことなのだけれど。
よいしょ、と荷物を背負いなおして。肩に掛かる重みを感じながら、シリルは再び国境へと向かった。

どきり、としてシリルは足を止めた。
前方から感じられる、微かな魔力。それは、けれど決して強いものではなかった。魔法を忌避するリンドでなければ、大して気にもしなかっただろう。だが、ここは魔法使いの入国すら認めない国だ。国境を越えた途端、いっそ分かりやすいほどに魔力が存在しないこの地で、唐突に現れた魔力は不自然と言うにも程がある。
耳を澄ませ、気配を探る。だが、動く者の気配はない。余程気配を消すのが上手いのか、それとも――魔力を纏っているのは、動くはずのない物なのか。
その考えに至って、シリルは自分の思考に再びどきり、と胸を高鳴らせた。不安や恐怖ではない。期待という名の鼓動。
探している遺跡は、荒れ野の中の巨石群。求める人の歌は、その地で魔法使いが妖魔と出会ったことを詠っていた。その地で魔法が使われた、と。もしも、今ここで感じている魔力が、その時の残滓なのだとしたら。
そういえば、とシリルは思う。魔法使いは罪を犯したと、アルキミアは詠っていたのではないだろうか。罪を犯して、国を追われた、と。そして、リンドが魔法使いに対して国を閉ざすようになったというその時期は、アルキミアがシリルの故郷でこの歌を詠っていたその時期と、もしかして、ちょうど重ならないだろうか。
もうほとんど、面影すら覚えていない人。歌声の記憶すら曖昧で。どうしてそんな相手を、今もって必死になって捜しているのか、自分でも良く分からないけれど。ただ曖昧模糊とした記憶の中、その時に聴いた歌の内容と、揺さぶられた心の動きと、焚き火の炎を照り返してきらきらと光っていた黒髪だけは、妙に鮮明で。
――そうか。黒髪だ。
また一つ、符号が合う。色素が薄いツェリアの人とも、赤毛の多いミドグリアの人とも違い、リンドの民には黒髪が多い。

子供の頃、アルキミアにあれ程の異国の香りを感じたのには、もしかするとその髪の色の違いも大きかったかもしれない。

高鳴る胸に息苦しさすら覚える。きっと、ここだ。そんな、確信めいた感情。

思わず走り出したくなる感情を必死で抑えて、シリルはわざとらしいほどにゆっくりと歩き出した。強い風にさらわれるマントを自分の身に巻き付け、フードを被り直す。いつもはさして気にも留めないそんな動作に、意識を集中して。ことさらに、慎重に。

だがそれでも、再び歩き始めてから五分も経たないうちに、目指す遺跡はシリルの目の前に現れた。もう随分と高い位置まで昇った太陽が、白茶けた地面を照らす。その中に浮かび上がる、くっきりと濃いシルエット。目の前に広がる風景に、シリルの鼓動はまた一度、大きく高鳴った。間違いない。漂う魔力は、目の前の建物から感じられる。岩と言えるほどに大きな石を、更に組み合わせて作られた巨大な建造物。

――建造物？

「……あれ？」

思わず声に出して呟いてしまって、シリルは慌てて周囲を見回した。仮にも今、自分は身を隠して旅をしている最中だというのに。迂闊にも程がある。

幸いにも辺りに目につく人影はなく、シリルはホッと息を吐いた。

続いて、目の前に広がる光景をまじまじと見つめる。

求めているのは、荒れ地の中の巨石群、のはずだ。色んな符号から考えて、それはきっとここで合っているはずなのに。

たしかに、自分が立っているこの場所は、荒れ地と呼ぶのに相応しい場所ではあるけれど。そして目の前にあるのは、その退色による特徴的な色合いや風化の度合いからして、確かに古代の遺跡なのだけれど。巨石群というより、石造りの馬鹿でかい建物のように見えるのは気のせいだろうか。

――いや、まあでも。考えてみれば、アルキミアがどれくらい本当のことを詠っていたか、なんて分からないわけだし。

もしかすると、荒れ地の中の巨石群というのは、追われる彼女が身を守るためのフェイクだったのかもしれない。何より、あるはずのない魔力の残滓が残っている遺跡なんて、怪しいに決まっているのだから。

そう思ってみれば、いかにもそれが本当のようで。シリルは一人、うんうんと頷くと、改めて前方の遺跡を見やった。逸る心を落ち着けるために、大きく深呼吸。

よし、と声に出さずに呟いて。シリルは静かに建物に足を踏み入れた。

かつてはきっときちんと扉がついていたのであろう入り口は、今はただぽっかりと黒く沈んでいる。遺跡の中に入ったシリルは、内部の薄暗さを見て取り、短く呪文を唱えた。次の瞬間、魔力で作られた光の球がぼんやりと辺りを照らす。

そこは、さして広くもない細長い長方形の小部屋だった。入り口以外には明かり採りとなるような窓もなく、内部からは逆に入り口が白く浮いて見える。それほど気温が低いわけでもないのに、むき出しの石壁がひどく冷たい。

魔法の光を従えて、シリルは壁伝いにぐるりと部屋の中を回

ってみることにした。右手を壁に付けて進むやり方は、幼い頃に読んだ冒険譚に出てきた方法だ。こんな狭い部屋ではあまり意味がないかもしれない。だが、やらないよりは良いだろう。あまりの暗さに、もしかすると次の部屋へ続く扉を見逃すことだってあるかもしれないし。そのまま中程を過ぎたと思われる辺りまで進んだシリルは、ふと奇妙なことに気付いて首を傾げた。

「おかしいな」

とりあえず、そのまま歩き続ける。壁に触れた右手は離さない。だが、ぽっかりと空いた入り口まで戻ってきた時点で、シリルの疑惑は確信に変わった。

――奥へ進む扉が、一つもない。

部屋の大きさと外から見た建物の大きさからして、この遺跡の中に他の部屋があるのは明らかなのに。部屋の中をぐるりと一周しても、そこへ進む扉が見あたらない。

「まさか、埋めてしまった？」

魔法使いに対して、異常なほどの警戒を見せるこの国で、魔力を発する遺跡など、放っておく訳はないのかもしれない。

だが、シリルはしばらく考えて首を振った。壁は全てむき出しの石壁だ。扉を埋めたのなら、痕跡が残らないはずがない。それに、埋めるのであれば入り口から埋めてしまっておけば良いわけで。

漂う魔力に、苛立ちが募る。きっと、ここだと思うのに。

「……魔力？」

思い当たるものがあることに気付いて、シリルは顔を上げた。最初に感じた時よりも、格段に濃くなっている魔力。光を消して目を瞑り、感覚を研ぎ澄ませて辺りに漂う魔力を探る。もしかすると、視覚に頼ったこと自体、間違っていたのかも。

改めて探ってみると、部屋に漂う魔力には明らかに奇妙な点があった。普通ならば、均一に拡散していくはずの魔力。ここに今、極端な魔力を帯びた存在がない限り、空中に漂う魔力はほぼ均質なはずだ。なのに、ただ一点、妙に魔力が凝っている場所がある。

「これだ！」

勢いよく目を開くと、シリルはそのまま部屋の一角へ駆け寄った。壁の前で立ち止まる。一見したところ、何の変哲もない石の壁。けれど。

小声で囁くように呪文を唱える。その詠唱を続けたまま、シリルは目の前の壁に手を伸ばした。そのまま、ゆっくりと指先から突き刺すように壁へ近づける。

ずるり。

石壁に突き当たってその硬質な感触を伝えるはずだったシリルの指は、だがその瞬間、奇妙な音と共に石の壁に埋もれていた。第二関節まで石に埋もれた指先は、決して尋常な光景ではない。だがそれを見ても、シリルは慌てなかった。まるで液体のように指先に纏い付く壁の感触を確かめて、目を細める。

「当たり」

魔法の壁の呪文だ。幻の壁を作り出す魔法。魔力が感じられなければ、その存在に気付くこともないだろう。だが、解除の呪文さえ使えれば、通り抜けることは容易だ。そのため、魔法が使えない人から何かを隠したい時、魔法使いがよく使う魔法。

けれど。

「隠す……？　一体、何を？」
何だか、おかしい。この遺跡に漂う魔力は、ここで何らかの魔法が最近使われたからではないのだろうか。
解除の呪文を途切れさせることなく、歩を進める。身体の全てが壁の中に入り込むよりも前に、指先の手応えが変わったのを感じて、シリルは足を速めた。壁の中から勢いよく抜け出して、大きく息を吐く。
下を向いて何度か深呼吸を繰り返した後、ようやく顔を上げて辺りを見回したシリルは、次の瞬間、思わず息を止めた。
室内は、かなりの広さだった。ほぼ正方形の部屋は、やはり石造りの壁がむき出しのまま。明かり採りの窓などもない室内は、けれど、先ほどの部屋とは違って煌々と照らされていた。天井近くに、魔法の光球が無数に浮いている。
だが、その無数の光球に疑問を抱くよりも前に。部屋の中央に鎮座する存在を目の当たりにして、シリルは目を見開いた。
「ドラ……ゴン……？」
呟いた声は、奇妙に乾いている。
光球の光を反射する、暗緑色の大きな鱗。広大な室内のほとんどの空間を占める、巨大な身体。その身体の割に小さな四肢は、けれど、鋭い爪で見る者を威嚇する。蝙蝠のような大きな翼は、今は折り畳まれて。――その姿は、幼い頃に見聞きした幻の獣、ドラゴンにそっくりだ。
そっくり、なのだけれど。
「どうして？」
何故、こんな所にドラゴンが居るのだろう。遙かな幾千年の古代には、当たり前のようにこの世界に棲息していたと言われるドラゴン。彼らは、いつしかこの世界から姿を消したと言われている。でもそれは、ただの伝説のはずで。本気になって信じる者など、誰も居はしない。
幻の獣という存在は確かにロマンティックで。だからシリル自身、本当に居たのなら良いのに、と思ったことはあるけれど。それは、遠い昔の子供の空想。まさかドラゴンが本当に存在していて、その上、この世界に生きて残っているなんて。
「生きて……」
そのことに改めて気付いて、シリルは思わず後ずさった。
ドラゴンの目は、固く閉じられている。だが、規則正しく動く腹より何より、その纏う強大な魔力が、その幻獣が明らかに生きていることを示していた。感じ取れる、あまりにも強い力にゾッとする。もしもドラゴンが目を覚まし、シリルを敵と認めれば、きっと命を奪うことくらいわけないだろう。
そんな風に考えて、けれど次の瞬間、シリルは思わず苦笑した。たとえドラゴンがどれほど凶暴で怖ろしい存在であったとしても、今ここで怖れる必要がないことは一目瞭然なのに。一瞬、冷静な判断力を欠いた自分が可笑しい。
シリルがそのドラゴンの実在を感じ取れるのは、実際の所、その纏う強大な魔力だけだった。ドラゴンの手前に、透明な壁が立ちふさがっている。いや、むしろ透明で硬い物体によってドラゴンの身体が覆われている、と言った方が正しいだろう。まるで水晶のように澄んだ、硬質の物体。それが何であるかを、シリルは知っていた。
「封印の、魔法……」
生物を、半永久的に眠らせるための魔法。目の前のドラゴン

は、しっかりと封印されている。少なくとも、その封印が解かれない限り、こちらに危害が及ぶことはない。
それにしても、とシリルは思う。それにしても、一体誰が、どんな目的で、このドラゴンを封印したのだろう。
決して、簡単な魔法ではない。単純に考えても、相手の魔力を上回る魔力の持ち主でなければ、そもそも封印など出来はしないのだ。透明な壁には、傷一つ見あたらない。封印が施されてから、少なくとも千年以上は経っているはずなのに。これほどの魔力を持つドラゴンを、こうまで完全に封印するなんて、きっと、容易なことではなかったはず。
そういえば、見て回ったいくつかの古代の遺跡には、もれなく魔法を施されていたのであろう痕跡が残っていた。もしかすると、古代の人々は今よりももっと簡単に魔法を使えていたのだろうか？
そこまで考えて、シリルはふと我に返った。肩を竦めて自嘲する。一体いつから、自分は古代遺跡の研究家になったんだ？
つまり――ここに残る魔力は、このドラゴンが発しているってことで。
発せられ続けている魔力のお陰で、魔法の光も、魔法の壁も、千年以上もの昔から拡散することなく今まで残っているのだろう。
確かに、ここで魔法が使われたことは、間違いなかったけれど。それは、遙かなる古代の話。
「こんな遺跡がリンド以外にあったら、きっと多くの魔法使いが興味を持って押しかけるのになあ」
なんて、声に出して呟いて。
それが悔し紛れだという間違いようのない自覚に、シリルは声を立てて笑った。
――全く、あれは不思議な遺跡じゃった。まあ、総じて遺跡というのはどこかしら不思議なところがあったもんじゃ。今や誰もその遺跡が作られた目的を知らないのじゃから、無理もないことではあるの。
旅の楽士を求める旅のはずが、驚くべき物との遭遇となってしまったわけじゃ。シリルの奴はがっかりしておったが、そう捨てた物でもないと思うがの。そうそう誰もが出来る経験ではないのじゃから。そうは思わんかね？
――ふう。少し喋り疲れたわい。今日はここまでにさせてもらおうかの。

# 第九章　使い手を選ぶ

人は誰でも修行をすれば魔法を使えるようになる、と思ってはおらんかね？　そうじゃな。知らない者は、そう思っていてもおかしくはない。何を隠そう、シリルも最初に故郷を出た時はそう思っておったんじゃ。じゃから、自分に魔力があるかどうかなんて考えることもなしに、「魔法使いになりたい！」などと言えたわけじゃな。

もちろん、本当はそうじゃない。魔力というのは生まれつきのもんじゃ。持つ者は当たり前のように持っておるが、持たない者はどれほど努力したところで持つことは出来ん。それをシリルが知ったのは、故郷を飛び出してから半年以上後のことじゃ。思えばあれは、奴にとって、その後の人生を左右する出会いだったんじゃな――。

レグルに向かう街道を急ぎ足で歩いていたシリルは、道端にキラリと光る物を目にして、ふと足を止めた。今を盛りとばかりに生い茂っている濃い緑の草むらの中で、何かが強い夏の陽射しを反射している。

「何だろう？」

草むらの中に分け入って、濃い緑色の中からキラキラと光る物をすくい上げる。手のひらにすっぽりと入る大きさの円盤だ。光っていたのは、磨かれた銀色の金属で出来ていたから。中央に穴が開いていて、黒い組紐で出来た輪がそこに結びつけられている。長さからして、首にかけるためのものかもしれない。

「ペンダントかな？」

首を傾げながら円盤をひっくり返したシリルは、そこに浮き彫りにされた文様を見て、もう一度首をひねった。奇妙な記号の羅列と、不気味なほど細かく彫り込まれた鴉の姿――おおよそ、装飾品に相応しいモチーフとは思えない。

「こっちの人は、こういう不思議な模様が好きなのかな？」

呟きながら、手に持ったそれを太陽にかざす。磨き込まれた銀色の金属が、陽光を反射して白く光った。大きさの割に結構な重さがあるそれは、どうやら本物の銀で出来ているらしい。よく見れば、付けられた組紐だって上質だし、奇妙な品物だけれど、落とし主にとってはきっと大切な物なのだろう。そう思うと再び道端に放り出す気にもなれなくて、シリルはそれを大切に懐にしまい込んだ。この先の町で、役所にでも届けておこう。

街道に出てズボンを払うと、千切れた草の葉がひらひらと落ちる。故郷を出たときには長めだったズボンの裾は、もう、すっかり短くなっていた。強い照り返しに、前を行く馬車の幌も街道の乾いた土も、全てが白っぽくかすんでいる。次の町に辿り着けば、レグルまではもうすぐだ。

軽くなった荷物がもたらす心細さを、魔法都市レグルに対する期待で埋めて。シリルは意気揚々と歩を進めた。

氷とレモンのスライスが浮かべられた水を一気に飲み干して、シリルはふぅ、と息を吐いた。カラカラに乾いた喉に、冷たい

感触と爽やかな香りが心地良い。この町に到着したのは、もう夕暮れも近い時間帯だった。町の規模の割に通る旅人の数が多いのか、酒場には多くの人々が詰め込まれ、随分な盛況ぶりだ。お陰で席に着くにも随分と待たされてしまったが、今のシリルにとって、こうした賑わいは決して嫌なものではなかった。活気のある町の雰囲気が、何だか楽しい。

注文を聞きにやって来たウェイターに一番安い料理を注文し、椅子に座り直したところで、シリルはふと、懐にある違和感に気づいた。手を差し入れて、指に当たる硬質な感触に昼間拾った奇妙なペンダントのことを思い出す。役所に届けるつもりだったのに、すっかり忘れていた。もっとも、町に着いた時間は決して早くなかったから、覚えていたとしてもどのみち今日届けることは無理だったかもしれないけれど。

懐から引っ張り出して、改めて眺めてみる。変わった模様が浮き彫りされているのは片面だけで、もう片面は寂しいほどに何の装飾もない。結びつけられた組紐にしたって、いやに凝った編み方をしている割には使われている紐は黒一色だけで、何だか妙に実用的な印象を受ける。

右手の人差し指に組紐を引っかけてクルクルと回してみると、銀色の円盤はランプの光をキラキラと反射した。そうして見れば、確かに綺麗で。だけれど、やっぱりどこか変だな、とシリルは思った。実用的な装飾品だなんて、矛盾している。もしかして、単なるペンダントではないのだろうか。

ウェイターが料理を運んできたのに気づいて、手の動きを止める。だらん、とぶら下がったペンダントを何の気なしにテーブルの上に置いた、その時。

「あ～っ、それ！」

酒場の喧騒の中でもひときわ大きな声が聞こえて、シリルは驚いて声の方向を見やった。一人の男が、旅人達でごった返すテーブルの間を縫って、ずんずんとこちらに近付いて来るのが目に入る。精悍な容貌と、日に焼けた逞しい身体。その服装からして、彼もまた旅人だろう。好き勝手な方向にはねた明るい茶色の髪が、どこかいたずら好きな少年のような印象を与える。

「それ！　どこで見つけた？」

シリルのテーブルまでやって来た男がそう言って指さしたのは、先ほどシリルがテーブルの上に置いたペンダントだ。突然近付いてきた男に、血走ったような目で迫られて、シリルは思わず目を白黒させた。一体、これがどうしたというんだろう。

「もしかして、南の街道に落ちてなかったか？」

「そう……ですけど」

再びものすごい勢いで訊ねられて、呑まれたように頷く。

「ああ、やっぱりだ」

途端、男の表情がパッと明るくなった。その嬉しそうな表情に、シリルはようやく彼の言動の理由に気が付く。きっと、彼がこの奇妙なペンダントの落とし主なのだろう。

「あなたの物だったんですか？　良かった。役所に届けようと思ってたんです」

そう言ってペンダントを差し出したシリルに、男は少し驚いたような表情をした。ペンダントを受け取ろうと手を伸ばしかけて――思い直したように引っ込める。それから、黙って首を横に振った男に、シリルはきょとん、として首を傾げた。あれほどの勢いで詰め寄って来たのだ。きっと、とても大切な物の

はずなのに、どうして受け取ろうとしないのだろう？
「どうしたんですか？」
不思議そうな表情で訊ねるシリルに、男は苦笑を浮かべた。
「いや、一応役所に届けてくれないか。俺も届けを出してるから、それを確認してから返してくれればいい」
そう言って、肩を竦めて見せる。
「でないと、本当に俺が落とし主か、あんたには分からないだろう？」
男の説明は、確かにもっともだ。シリルはなるほど、と頷くと、手に持ったペンダントを再びテーブルの上に戻した。そんなことを考えもしなかった自分の未熟さが、少し情けない。世の中、信頼の置ける人ばかりではないことは、もう充分に知っているはずなのに。
「いきなり大声を出したりして、悪かったな」
バツの悪そうな表情でそう言うと、男はくしゃり、と自分の髪をかき上げた。前髪の間から覗く目はもう、血走ってはいない。
「あんたみたいな人が拾ってくれてて、助かったよ。お礼と、それからお詫びに今日は奢らせてくれ」
そう言って笑った男の人懐こい表情に、シリルもまた、笑顔で頷いた。

ひとまず冷め切ってしまった料理を平らげ、男が半ば無理矢理に追加注文してくれた果物を口に運びながら、シリルは彼の話に耳を傾けていた。
ケヴィンと名乗ったこの男は、ルチアの出身だという。しかも、かの魔法都市レグルに住んでいるのだと聞いて、シリルは好奇心に目を輝かせた。
「レグルの人は、みんな当たり前のように魔法を使ってるって、本当ですか？」
期待に満ちた面持ちで訊ねたシリルを、ケヴィンは面白そうに見やる。
「何だ、魔法に興味があるのか？」
勢いよく頷いて見せたシリルに、ケヴィンはニヤリと笑った。グラスに半分ほども残ったエールを一気に飲み干すと、椅子をぐるりと回してシリルに向き直る。
「さっきの護符、出してみな」
「護符？」
聞き慣れない単語に首を傾げたシリルは、けれどケヴィンの視線が先ほどのペンダントに向いているのに気付いて、それをテーブルの上から取り上げた。
「これですか？」
「そうそう、それ。ちょっと、こっちに置いてみな」
ケヴィンの言葉に従って、ペンダントを彼の側に置く。ランプのオレンジの光を反射する、不気味な鴉と奇妙な記号。「護符」と言われれば、そんな感じがしなくもない。
「なんと、これは魔法の護符なんだ」
「……え？」
何か、驚くようなことをさらりと言われてしまった気がして、シリルは思わず聞き返した。ケヴィンの顔を、まじまじと見つめる。陽気なその表情は、嘘をついて騙してやろう、なんて風には見えないけれど――からかわれているのだろうか？

「何だ、信じないのか？」
すねるような口調でそう言われても、言葉を返すことが出来ない。信じるも信じないも、魔法と名の付く物を見たのは、これが初めてだ。本当か嘘かなんて、判断も出来ない。
「ここに、鴉が彫ってあるだろ？　こいつをよく見てみろよ。普通じゃない所があるだろ？」
言われて、シリルは改めて銀色の円盤を観察した。円盤の表側、上半分に浮き彫りにされた一羽の鴉。羽根の一枚一枚まで、まるで本当に飛べそうなほどに細かい。光を反射して、キラリと光る瞳。獰猛そうな嘴。そして。
「足が……三本？」
畳まれた翼、羽毛の中から三本の足が突き出しているのに気付いて、シリルはギョッとした。
「三本足の鴉は魔法の象徴って、聞いたことないか？」
ケヴィンの問いかけに、ぶんぶんと首を横に振る。
「そうか？　そっちじゃあんまり知られてなかったのかな。魔法の品は、どこかしらに三本足の鴉を付けることになってるんだ」
そう言われてようやく、シリルはケヴィンがその鴉を見ろと言った理由を理解した。つまり、三本足の鴉の浮き彫りがあるからには、それは本物の魔法の護符なのだ、ということなのだろう。けれど。
「これで、信じたか？　これが魔法の護符だって」
改めてそう問いかけられても、やはりシリルは頷くことは出来なかった。別に、ケヴィンのことを疑っている訳じゃない。だが、そもそも三本足の鴉なんて初めて見たのだ。それが魔法の象徴だと言われて、だからこれは本物の魔法の護符です、と言われても、そう簡単に納得なんて出来ない。
「なんだ、まだ信じられないのか」
口元をへの字に曲げてそう言ったケヴィンの表情に、少し慌てる。彼を信じていない訳ではないのだと、そう弁明しようとしたシリルは、けれど次の瞬間、驚くべき言葉を耳にした。
「じゃあ、実際に試してみると良い」
「試す？」
ぽかん、と口を開けたままで、ケヴィンをまじまじと見つめる。試すって、どういうことだろう。魔法を使ってみろ、ということだろうか。そんな――簡単に？
「魔法使いじゃなくても、魔法を使えるのが、この護符の良いところだ。こいつに触って『ゾハール』と唱えるだけで良い。やってみな」
促されて、もう一度改めて護符を見つめる。奇妙な模様が浮き彫りにされた、円盤。その模様は確かに、ただのペンダントとしては変だと思うけれど。でも逆に言えば、変な模様のペンダント以上の物にも見えないのも事実で。こんな物で、本当に魔法が使えてしまったりするのだろうか。魔法使いでも何でもない、自分でも？
ごくり、と音を立てて唾を飲み込む。隣に座っているケヴィンは、ただ黙ってこちらを見ているだけ。そんな彼を見ていると、シリルは急に、躊躇している自分がひどくバカらしいように思えて来た。自分にとっては、魔法はすごく特別なことだけれど。レグルの人々は、みんな普通に魔法を使うって言うし、きっと、本当にここで魔法が使えてしまっても、彼にとっては

それほど大したことではないのだろう。楽しそうにこちらを見ているケヴィンの、その余裕の表情が少しシャクで。シリルは、思い切り大きく息を吸い込んだ。右手を円盤の端に当て、教えられた言葉をはっきりと口にする。

「ゾハール」

そう、言い終わった途端。

走ったあまりに強い閃光に、シリルは思わず仰け反った。苦痛すら感じるほどに眩しいその光に、反射的に目を閉じる。直後、何かが自分と護符の間に割り込んだのをシリルは感じた。誰かの手で、両目を覆われる。普段なら、不安を喚起させる行為。だが、灼けるような光が遮られて、シリルはほっと息を吐いた。

その体勢でいたのは、多分、数秒にも満たない短い時間だっただろう。

「おい、目を開けてみろ。大丈夫か？」

手を退けられるのと同時に心配そうな声でそう問いかけられて、シリルはそろそろと瞼を上げた。途端、世界がぐるぐると回っているような酷い目眩に襲われる。強すぎる光は、色素の薄いシリルの瞳にとって、充分な凶器だ。焼き付いた残像と滲んだ涙に、まともに周囲も見えない。ただ、心配そうに覗き込むケヴィンの顔だけが、辛うじて見て取れた。

「見えるか？　ああ、充血してるな」

もう一度手で両目を覆われ、されるがままに瞼を閉じる。ズキズキと、脳に響くような目の痛み。目を保護するためだと分かっていても、滂沱のごとく流れる涙が、少し恥ずかしい。

近くから、聞き慣れない旋律が聞こえてくる。それがケヴィンの声だと気付いて、シリルは少し驚いた。先ほどまで話していた時とは随分印象の違う、包み込むような柔らかい声。低めのテノールで唱われる旋律は、とても耳に心地良い。いや、耳だけではない。優しく流れるその声を聞いていると、何だか目の痛みまで引いていくようだ。

――痛みが……？

それが気のせいではない、ということに気付いて、シリルは驚いて目を見張った。先ほどまではあれほど痛んでいた目が、今はもう見開いても苦痛を感じない。否応なく溢れていた涙も止まっている。

「あの……っ」

目の上に置かれたケヴィンの手を強引に外して、シリルはがばり、ケヴィンに向き直った。クリアになった視界の中、驚いた表情のケヴィンが、次の瞬間、ほっとしたように微笑む。

「もう、大丈夫か？」

それでもまだ少し心配そうにそう言ったケヴィンに、頷くのさえもどかしい。

「今のは、何なんですか？　もしかして……魔法？」

感じていた痛みは、もう欠片もない。自分の目は自分では見えないけれど、それでも、もう充血していないことは明らかだった。ただ、涙による熱っぽさの残滓だけが、あの痛みが夢ではなかったことを示している。

「あなたは、魔法使いなんですね？」

シリルの問いかけに、一瞬だけ躊躇して。ケヴィンは、けれど、はっきりと頷いた。

もう時間は随分と遅かったが、酒場に居る人の数はそれほど減ってはいなかった。さすがに新しく訪れる人は、もう多くない。だが、ようやく大きな町に辿り着いた喜びを、夜更けまで酒を飲むことで表す旅人は決して少なくないのだ。

けれどそんな中であっても、先ほどの閃光はそれ程大きな騒ぎにはならなかった。旅人達は皆、基本的に自分に利害がなければ好んで人と関わりを持とうとはしない。それに、それより何より、この辺りの人々は魔法に慣れているのだ。

「本当に、すまなかった」

そう言って頭を下げるケヴィンを、シリルは困惑した表情で見つめた。一瞬遅れて、頭を上げてもらえるようにお願いする。確かに、酷い目に遭わされた、とは思うのだけれど。それを癒してくれたのも、また彼で。だから、頭を下げてもらう必要なんてない、と思う。それよりも、さっきの不可解な出来事に関する説明が欲しいから。

「えっと、これって結局、何だったんですか？」

そう言ってシリルが示したのは、テーブルの上に投げ出されたままになっていた魔法の護符だった。ついさっき、恐ろしいほどに強烈な閃光を放って、シリルの目を傷めたそれ。けれど今はまた、静かにランプの光を反射している。

「魔法の護符だよ」

ケヴィンの答えは、至極簡潔なものだった。言葉を切って、ぽつり、と付け足す。

「ただし、欠陥品だな」

「欠陥って……」

さっきの、あの暴走のことだろうか？　そう訊ねようとしたシリルの言葉を、ケヴィンは首を横に振って遮った。

「いや、違う。使い手を選ぶんだ――それも随分と極端に、な」

「使い手を、選ぶ？」

首を傾げたシリルに、ケヴィンは真剣な顔で頷く。

「ここを見てみてくれ」

そう言うと、ケヴィンは円盤の下部を指さした。奇妙な記号が羅列されている部分だ。指先で、浮き彫りをなぞる。

「ここに書いてあるのは、使える魔法の種類だ。左側二つの記号で、『持続する光』という意味。残りの記号が、合い言葉との関連を示している。ところが」

そこで言葉を切って、ケヴィンはもう一度シリルに目を向けた。いきなり始まった講義を呆然と聞いていたシリルは、その表情に思わずドキリとする。何か、意味ありげな表情。

「記号が、一つ足りない。刻み忘れたんだな。こんな護符では、いくら普通の人間が合い言葉を唱えたところで、魔法は発動しない。……そのはずだった」

ケルヴィンの口調は、あくまでも淡々としている。だが、その言葉の意味がシリルにはよく分からなかった。だって現に、自分の合い言葉で魔法は発動したじゃないか。あの時走った閃光は、何かの間違いだったとでも？

新しいエールのグラスに口をつけて、ケヴィンは言葉を続ける。

「一方で、この護符を使って魔法を使える人間が、一部には居る。魔法使いだ。元々魔法を使える者ならば、護符に描かれた魔法記号の一つや二つ、足りなくても魔法を使うのに支障はないだろう」

「魔法使い？」
突拍子もないケヴィンの科白に、シリルはまじまじと彼の顔を見やった。冗談を言っているようには見えない、けれど。
「僕は、魔法使いじゃないですよ」
「分かっているさ。三本足の鴉の意味も知らない魔法使いなんて、いるわけがない。でも、じゃあどうしてこの護符が使えたんだ？」
ケヴィンに真剣な口調でそう問い返されて、シリルは少しムッとした。そもそも、今回のことはケヴィンが唆したようなものなのに。
「知りませんよ、そんなこと」
ぷい、とそらしたシリルの顔を、ケヴィンは怯むことなく覗き込む。
「本当に知らないのか？　あんたが並大抵じゃない魔力を持ってる、ってことだぞ？」
――誰の魔力、だって？
ケヴィンの発したあまりに意外な言葉に、シリルはぽかん、として彼を見返した。
「僕は、魔法使いじゃ……」
言いかけた言葉を、ケヴィンが再び遮る。
「ああ、それはもう分かってる。魔法使いじゃなくたって、魔力を纏う者は居るんだよ。魔力を持っているかどうかは、生まれつき決まっている。そして、魔力を纏う者だけが魔法使いになることが出来る。……誰も、教えてくれなかったのか？」
そう言ったケヴィンの表情は、あくまで真剣だけれど。
そんなこと――本当だろうか？　生まれつきというなら、子供の頃からそうだったはずだけれど。そんなこと、誰も知らせてはくれなかった。
そこまで考えて、シリルは心の中で頭を振った。教えてくれる訳がないのだ。故郷では、魔法なんておとぎ話だと言われていた。魔法使いなんて、一人もいなかった。シリルの魔力に気付く人なんて、いるわけがなかったのだから。
「それ……本当ですか？」
答えは、もう分かっていたけれど。確信を欲して訊ねたシリルに、ケヴィンはあっさりと頷いて見せる。
「嘘じゃないさ。しかも、あんたの魔力はかなり強力だよ。言い訳になっちまうが、まさか、あんたがあの護符を使えるなんて思ってなかったんだ。たとえ護符の力を借りたとしても、習ってもない魔法を構成するなんて、並の魔力じゃ出来ないからな。あんた、修行したらきっと良い魔法使いになれるぞ」
欲していた以上の答えに、シリルは思わず顔を輝かせた。何て幸運なんだろう。魔法使いになりたいと、そう思うばかりで。魔力が必要だなんて、そんなことすら知らなかったのに。まさか自分が、並以上の魔力の持ち主だったなんて。
「僕、魔法使いになりたいんです。僕に魔法を教えて下さい！」
勢い込んでそう言ったシリルに、ケヴィンは目を丸くした。
「はい、こちらで届けられていますね。間違いありませんか？」
言葉と共に差し出された一枚の書類に、シリルはざっと目を通した。確認すべき点は一つだけ。そこに書かれたサインが、ケヴィンの物かどうか。
「大丈夫です」

問題がないことを確認して、書類を返却する。それからシリルは、懐から銀色の護符を取り出すと、それをそのまま傍らに立つケヴィンに差し出した。
「じゃあ、これ、お返しします」
「ありがとう」
受け取った護符を上着のポケットに仕舞うと、ケヴィンはシリルに向かってにこり、と微笑む。
「さあ、行こうか」
そう言って歩き出したケヴィンに、シリルは元気よく頷いて彼に並んだ。背の高いケヴィンと並ぶと、成長途中のシリルは頭一つ分小さい。歩幅の関係で、並んで歩こうとするとどうしてもやや小走りになってしまうのだが、そんなことすら今のシリルには嬉しかった。忙しない足の動きが、今の自分のわくわくする気持ちによく似合っている、と思う。
この次の街は、憧れの魔法都市レグルで。一緒に旅をしている人は、魔法使いその人で。自分には、魔法使いになれるだけの充分な魔力があって。足取りだって、軽くなるというものだ。
「そう言えば、お前、どうして魔法使いになりたいなんて思ったんだ？」
ケヴィンにそう訊ねられて、シリルはその足取りのままの弾むような口調で答えた。
「妖魔の国へ行きたいんです」
その口調とは全く似合わない科白に、ケヴィンは一瞬、絶句した。
「……そりゃまた、どうして」
「探してる人がいるんです。その人も魔法使いなんですけど…その人が、居るかもしれないから」
そう答えたシリルの表情は、どこか遠くを見つめているようで。叶わないと分かっている夢を、それでも追い求めずには居られない——そんな表情に、ケヴィンは何かを納得したように頷く。
「へぇ、恋人か」
「えっ？」
ケヴィンの言葉に、シリルはきょとん、と目を見開いた。同時に、頬がかぁっと熱くなる。誰が、恋人だって？
「ち、違いますよ！」
ぶんぶん、と首を振りながらそう言ったシリルに、ケヴィンはわざとらしく意外そうな表情をして見せた。しばらく考えて、ぽん、と手を打つ。
「そうか、憧れの君って奴だな」
「何でそうなるんですか！」
からかうような口調のケヴィンに、シリルはムキになって言いつのった。真っ赤な顔で言ったって、説得力なんてないことは分かっていたけれど。でもそんな風に誤解されて、黙ってなんていられない。
「それにしても、物騒な女の子だな。考え直した方が良いんじゃないか？」
「違いますってばっ」
広い街道に、元気な声が響く。まだ陽は中天に達していないのに、激しい陽射しは、早くもゆらゆらと熱気を凝らせ始めていた。

――と、いうのがシリルとケヴィンの出会いじゃった。全くもって、散々じゃな。シリルも随分と世間知らずじゃったが、ケヴィンものう……。ある意味、似た者同士なんじゃろうが。

だいたい、普通は止めるじゃろう？　妖魔の国へ行きたい、なんて言われたら。冗談だと思ったにせよ、世間知らずの絵空事と思ったにせよ。からかっとる場合か？

結局この後、シリルはケヴィンについて魔法を修行することになる。それからも、まあ色々とあるわけじゃが、またそれは別の機会にでも話すとしよう。

――ふう。少し喋り疲れたわい。今日はここまでにさせてもらおうかの。

# 第十章　破壊〔前〕

最近、どうも妖魔の動きが活発になってきておるようじゃ。もう何百年、何千年と、妖魔の存在は公に知られることはなかったんじゃがのう。このところは、妖魔を見た、もしくは妖魔の被害に遭った、という者が増えてきたわい。もちろん、ただの勘違いというようなこともあろうがの。

シリルか？　ああ、奴も妖魔とは何度か渡り合っておるよ。以前にも、一度話したような気もするが。

そうじゃ。今回は妖魔に関する話でもしようかの。

これは、シリルが故郷に庵を結んでいくらか経った頃、ツェリアのやんごとなき方々と関わりあうきっかけにもなった時の話じゃ――。

トントン、と扉を叩く音と前後して聞こえてきた馬の嘶く声に、シリルは首を傾げた。他の土地ならいざ知らず、この辺りで馬を連れて自分を訪ねるような知り合いはそう居ない。そもそも、この辺りの人達はそうそう他の土地へ出かけないのだ。馬が必要になるようなことも滅多にない。

トントン、ともう一度扉が叩かれる。性急な感じはないものの、簡単に立ち去りそうな雰囲気でもない。シリルは用心深く扉に近付いた。訪問してくる誰もが、好意を持つ者とは限らない。このひと月ほど、立て続けに助けを求められ、あちこちに顔を出していた。恨みの一つや二つ、かっていてもおかしくはないのだ。

三度目のノック。だが、まだ訪問者は声を出そうとはしない。それがひどく怪しいことのように感じられて、シリルは扉を開けるのを躊躇った。少なくとも、ニールの人ではない。居留守を決め込もうか迷って、シリルは部屋の中をぐるりと見回した。ペニーとラプターがじゃれ合っているのが目に入る。多少の物音は、彼らの仕業と思ってくれるかもしれない。けれど次の瞬間、開け放された窓とその外で揺れる薬草畑が目に入って、シリルはその考えを断念した。いくらこの辺りが田舎だからと言って、窓を開け放したまま留守にする人間はいない。

「はぁい、今出ます」

そう声を掛けながら、用心深く扉を開ける。薄く開いた扉から、まず最初に目に入ったのは、毛並みの美しい栗毛の馬だった。その馬が乗せている鞍を見た瞬間、シリルはあれ、と思った。質素だがしっかりした作りの鞍は、けれど決して目を引く品ではない。だが、シリルはその鞍をよく知っている。

慌てて、馬の傍らに立つ訪問者に目を移す。そこに懐かしい人の姿を見つけて、シリルは思わず歓声に似た声をあげた。

「先生！」

「何だ、留守かと思ったぞ」

責めるような言葉とは裏腹に、ケヴィンは人懐こい表情で笑った。

簡素な食卓を二人で囲む。レグルに居た頃には当たり前のような光景だったけれど、今はそれがとても懐かしく、そして嬉

しい。
「随分、派手にやっているようじゃないか。噂がこっちまで聞こえてきたぞ。レグルのことなんて、もう覚えてないんじゃないか？」
香草と一緒に焼いた塩漬け肉をワインと共に飲み下すと、ケヴィンはそうシリルに話しかけた。その口調は、まるでからかうようだったけれど、その目の色はこれ以上ないほどに真剣で――それに気付いたシリルは、バツが悪いような気分になる。彼が何を言いたいのか、すぐに分かったからだ。魔法の頻繁な使用を戒める、レグルの掟。それは、レグルを出れば何の拘束力もない物ではあるけれど。
「忘れてません。不可抗力だったんです」
ちょっと顔を赤らめて、けれどシリルはきっぱりと反論した。確かに、自分はレグルを出てから魔法を使い続けている。でも、それは使いたくて使った訳じゃない。何より、自然本来のあるべき姿を魔法によって必要以上に歪めてはならない、とするその掟の理念に、シリル自身も心から共感しているのだから。
「本当か？」
「はい」
問い返すケヴィンに、はっきりと頷いてみせる。途端、ふっとケヴィンの眼光が弛んだ。そこに紛れもない安堵の表情を見い出して、シリルもほっと息を吐く。
「なら、良いんだ。お前も色々と大変みたいだな」
労いの言葉に、シリルは首を横に振った。色々とあったそれらは、けれど、全て自分がしたくてしたことだ。それに、レグルに居るケヴィンの方が、きっと何倍も大変なはずだから。
そう思い至って、シリルはふと首を傾げる。
「先生は、どうしてこちらに？」
「たまたま通りかかったんだ――と言ったら、信じるか？」
茶目っ気を含んだ表情でそう言われて、シリルは迷わず首を横に振った。確かに、ケヴィンは以前まで、一年の半分以上を旅に過ごしていた。でも、今はほとんど旅に出ることもなく、レグルでその日々の大半を過ごしていることを、シリルは知っている。
「お仕事なんですね？」
「ああ」
頷いたケヴィンを見て、シリルはふぅ、と息を吐いた。夏の夕暮れの明るい陽射しが、開け放した窓から食卓を照らす。ケヴィンが土産に持ってきてくれたワインが、夕陽と蝋燭に照らされて、グラスの中でキラキラと光った。
「厄介な仕事なんでしょうね」
シリルの知る限り、ケヴィンは魔法使い達の最高峰、魔法都市レグルでも有数の強い魔法使いだ。それは今もきっと変わっていないはずで、だから、心配はしないけれど。今ではほとんどレグルを出ていない彼がわざわざ自ら出向くとなれば、そう簡単な仕事であるはずもない。
「そうだな。レグルの評議会が、俺達を指名するくらいだから」
「俺――達？」
ケヴィンの科白の中に何だか不穏な言葉を聞いた気がして、シリルは怪訝そうに眉を顰めた。ケヴィンは、一人でここまで旅をして来たのだと思っていたけれど。
「ああ。今回の仕事は二人でやれってことだから」

そう言ってにっこりと笑ったケヴィンに、ますます眉を顰める。
「そうだったんですか。で、もう一人の方はどちらに？」
「俺の目の前にいるだろ」
半ば、予想はしていたけれど。あまりに当たり前のようにそう言って見せたケヴィンに、シリルはただ、失笑した。

小さな庵に、客用寝室なんて存在しない。自分の寝室を旅に疲れたケヴィンに明け渡したシリルは、居間の長椅子の上で十二回目の寝返りを打った。明日の出発は早いということだったから、早く眠ってしまいたいのに。仕事のことを考えると、何だか釈然としない思いが募って眠れそうにない。
別に、評議会からの依頼が嫌なわけじゃない。レグルの魔法使い達で作られた評議会に、何か含むところがあるわけでもない。どんなに厄介な仕事だって、ケヴィンと一緒ならきっと大きな問題はないだろう、と思う。けれど。
ケヴィンはこれまで、この庵に顔を出そうとはしなかった。現在評議会で副議長を務めている彼は、レグルに居る間もきっと多忙だったはずだ。けれどそのことで、シリルに助けを求めようとはしなかった。それは、自分の仕事にシリルを巻き込もうとしなかった、とも言えるだろう。なのに。
――どうして、今回に限って？
ケヴィンが自分をパートナーとして指名したのなら良い。でも、これまでずっとそうしなかったのは、きっと彼なりの信念があったからで。それをどうして、いきなり変える気になったのだろう？

ふぅ、と息を吐いて。ガラスを通して差し込む星の光を見上げながら、シリルは十三回目の寝返りを打った。

ケヴィンに導かれるまま、ふわり、と空から降り立ったシリルは、呆然として目の前にそびえる壮麗な建物を見上げた。
「ここ……ですか？」
思わず、懐疑の言葉が漏れる。
「あぁ、ここだ」
そんなシリルに対して、ケヴィンは何の気負いもなく頷いて見せた。いや、本当のところ、元よりシリルも否定の言葉を期待してなんていなかったのだ。だって、よりによって、こんな場所を間違える訳なんてないから。けれど。
「嘘でしょう？」
それでもそう呟いてしまったのは、そのことが示す事実が、あまりにも受け入れがたいものだったから。
ツェリアの中央、暁の都イルミナ。その最奥に位置する白大理石の王宮は、国政を司る諸侯の集う政治の中心地であり、そして――国王陛下を始めとする、王族の方々の住まう場所。
確かに、各国王家と魔法使い達の関係は、一般の人が思うほど疎遠ではないけれど。それは、あくまで個々の魔法使いにとっての話で。
「評議会はいつから王宮、しかも他国の王宮にまで口を出すようになったんですか？」
シリルの知る限り、レグルの評議会は国家への不干渉をその旨としていたのではなかっただろうか。国内外を問わず、王家や、あるいはそれに類するような所からの依頼は、一切を断っ

てきたはずだ。その取り決めはかなり厳格で、シリルの知る限り、破られたことなど一度もない。二十年前、ミドグリア王家で起こった事変の時ですら、評議会は動かなかったのだ。

もちろん、魔法使いが個人的に何らかの仕事を請ける場合には、その制約の限りではないけれど。でも、昨夜、ケヴィンははっきり「評議会からの仕事」と言っていたのに。

「どういうことですか？」

隣に立つケヴィンを見上げて、詰問調で問いかける。

「これは、干渉にはならないんだよ」

渋々といった口調でケヴィンが口にした言い訳は、けれど、そもそも説明にすらなっていない。

「そんな言葉で、私が納得すると思っているんですか？」

怒りすら覚えて、シリルは更に言いつのった。ケヴィンの拗ねるような表情は、子供っぽくさえ見えるけれど。今更、そんなことに誤魔化されたりはしない。ケヴィンのその表情が、聞かれたくないことを聞かれた時のものであることを、シリルは知っているのだから。

全く、この人はいつまで自分の庇護者でいるつもりだろう？確かに彼に比べればまだまだ未熟かもしれないけれど、一人前の魔法使いだと、そう認めてくれたのはもう何年も前のはずなのに。しかも、今回は仕事のパートナーなのだ。

そんなことで、心を悩ませる必要はない、と思っているのかもしれない。何かあった時、責任を負わなくてすむように、という配慮なのかもしれない。けれどそうだとしても、シリルは遠慮するつもりなんてなかった。

シリルに睨み上げられて、それでもケヴィンは口を開こうとはしない。二人の間を、はりつめた沈黙が流れる。

しばらくして、ふぅ、とケヴィンが息を吐いた。

「分かったよ」

どこか寂しげな表情でそう言って、顔を逸らす。そのケヴィンの表情に、思わずどきり、としてシリルは彼の視線を追った。視線の先に何もないことに気付いて、訝しげに彼の顔を見上げる。ケヴィンもまた、すぐにシリルに視線を戻した。けれどその顔からは、既に先ほどまでの表情は拭い去られている。

「だが、これが国家への干渉にはならない、というのは本当なんだ。今回、レグルの評議会に助けを求めてこられたのは、アベル二世陛下……これは、あくまで彼の個人的な依頼、ということになっている」

ケヴィンの口から出た依頼主の名前を聞いて、シリルは目を丸くした。「アベル二世」――聞き違いでなければ、それは現在のツェリア国王の名前だ。

「それで、どうして干渉じゃないってことになるんですか？」

王族からの依頼は、その内容がどうであれ、一切を受け付けないというのがレグルと各国王家の取り決めではなかっただろうか。たとえ、その依頼がどんなに個人的なもので、どれほど政治とかけ離れて見えようと。実際、王家からの依頼に全く政治色を見い出さないことは、非常に困難だから。

「干渉じゃない、というわけじゃない。今回は干渉とは見なさない、ということだ」

そこで一端言葉を切ると、不意にケヴィンはシリルの方に向き直った。真正面から真っ直ぐに見つめられて、思わず身を引く。

「今回の件には妖魔が絡んでるんじゃないか、って可能性がある」
低い声でそう囁かれて、シリルはただでさえ見開いていた目を、更に眦が裂けそうなほどに見開いた。
「妖魔……？」
これまで、言い伝えや伝承には数多く登場してきた妖魔。けれどその存在はもはや歴史の彼方に消え去り、今ではその実在さえ疑う人も少なくはない。だが、シリルは知っている。妖魔が本当にこの世に存在することも、そして、その存在が人間に認知される頻度が、この十数年程でこれまでにないほど急激に増えていることも。
同時に、それを聞いて、シリルはケヴィンが自分を今回の仕事のパートナーに選んだ理由が分かった気がした。もちろん、自分の力をかってくれていると信じたいけれど、きっと、それだけではない。彼は知っているのだ。自分が、以前から妖魔に並々ならぬ関心を抱いて来たことを。
「そんな時に、国家への干渉云々、言ってる場合じゃないってさ」
一転、軽い口調でそう言って、ケヴィンはひょい、と肩を竦めてみせた。それは、けれど充分に説得力のあることかもしれない、とシリルは思う。
評議会が国家への不干渉という理念を掲げるのは、魔法使い達に対して大きな影響力を持つ評議会が、特定の一国の味方となったりしたら困る、という諸国の感情に配慮してのことだ。けれど、妖魔が関わっているとなると、話は大きく変わってくる。その存在は、人間の作った全ての国にとって共通の敵であり、全ての人にとって、破滅をもたらす恐怖の対象なのだから。
「それ以上のことは、俺もよくは知らない。全く知らない訳じゃないが、どうせなら陛下御自ら、話してもらうことにしようぜ」
そう言って城門へ向かってすたすたと歩き始めたケヴィンを、シリルは慌てて追いかけた。
「ケヴィン、それからシリルも。来て下さって、本当にありがとう」
そう言ってにっこりと笑った国王を前に、シリルは黙って頭を下げた。
城門を叩いた二人が通されたのは、謁見の間ではなく国王の私室の一つだった。あくまでも、個人的な話という建前なのだろう。中庭に面して開かれた室内には夏の太陽の光が燦々と降り注ぎ、中庭に植えられた色とりどりの花が放つ甘い芳香に満ちている。その風景はあくまでも明るく爽やかで、妖魔の影といった暗い雰囲気は感じられない。
さして時間を置くことなく入ってきた王もまた、穏やかな笑顔を浮かべていた。だが、その表情にはどこかひどく疲れた様子があることに、シリルは気が付いた。一見、平穏そのものに見えるこの王宮で、けれど、確かに彼は何らかの心配事を抱えているのだ。
「こちらこそ、陛下のご尊顔を拝し、これ以上に光栄なことはございません」
ケヴィンが挨拶を返し、用意された椅子に腰を下ろす。全員が席に着くや否や、シリルが出されたお茶に手を付けるよりも

前に、王は口を開いた。
「あの、お話をさせて頂いてもよろしいでしょうか？」
そう言った彼の表情に、もう、笑顔はない。縋るように自分たちを見上げる彼の、その表情の痛々しさに、シリルは少なからず驚いた。アベル二世は、一国の王としては異例なほどに若い。けれど、シリルの聞き知る限り、彼はその年齢に似合わないほど分別のある少年という評判だった。いつも笑顔を絶やさず、毅然と前を向き――少なくとも、客に出した物を勧めるよりも前に、話を始めるような人ではない。
「どうぞ、お話し下さい」
ケヴィンに促され、少年は、途方に暮れたような表情で口を開いた。
「母の様子が、おかしいのです」

アベル二世の母、皇后ミリアは少々派手好きではあるものの、いつも明るく気さくな態度で国民に愛される、美しい女性だった。
だが、今から一ヶ月ほど前のこと、彼女の元に、上納品として一つの宝玉が送られて来たのだという。
「それは美しい紅色をした紅水晶で、それだけならば珍しくもないのですが、随分と大きな石で。母は、それを一目で気に入ったようでした」
最初、嬉しそうにその石を見せびらかす母のはしゃいだ様子を、王もまた嬉しいことだと思って見ていたのだという。だがそれが、全ての引き金だった。
「様子がおかしいことに気がついたのは、二週間ほど前のことでした。いつも、昼食を共にしているのですが、時間になっても母が食事に来ないのです。何かあったのかと、探しに行ったのですが――」
一端言葉を切ると、王は視線を落とした。自分の前に置かれたカップを両手で包み込むようにして持ったまま、注がれたお茶に口元に近付けることもなく、ほう、とため息を吐く。
その時、皇后は寝室で見つかった。いつもならばとっくに着替えて公務に向かっている時間帯だというのに、何故かまだ夜着のまま、宝玉を抱えて寝台の脇の床に座り込んでいたという。体調が悪いのかとも思ったが、そんなこともないらしい。王が「母様」と呼びかけると、彼女は夢から覚めたような様子で平常の皇后に戻り、その日はそれ以降、奇妙な様子を見せることはなかったのだが。
「それ以来、母はどんどんおかしくなっていきました。身なりにも気を遣わなくなり、誰とも顔を合わせようとしなくなりました。そして、宝玉を抱えたまま、決して離そうとしないのです」
そこまで言って、彼は唇を噛んだ。その表情からは、もはや王の威厳は感じられない。再び開いた口から漏れ出した声は、途方に暮れた少年のそれだった。
「あの母が、たった一ヶ月であんな風になってしまうなんて、決して普通じゃありません。私は、あの宝玉が何か悪い物だったのだと思うのです。見た目は、本当にただの綺麗な紅水晶にしか見えませんけれど――何か、魔法的な力が働いているのではないかと。それで、評議会の方に相談したんです」
「どうか、助けて下さい」と言って頭を下げた王の目から、

涙が零れた。

# 第十章　破壊〔中〕

「お前、どう思う？」
　ケヴィンにそう訊ねられて、シリルは王が出て行ったドアを見やった。冷めたお茶を、ごくん、と飲み下す。
「そうですねぇ。随分、辛い思いをされたようですけど」
　少年の目からぽろぽろと流されていた涙は、だが、部屋の外から侍従の声が聞こえた途端、ぴたりと止まった。そしてそのまま、彼は退出していったのだ。抜けられない仕事が、急に入ったのだという。まだ幼い王に、泣くことの出来る場所などほとんどありはしない。
　「すぐに戻ります」と言って出て行った少年の表情を思い出して、シリルはほう、と溜息を吐いた。
「えぇ……多分、妖魔の仕業で、間違いはないでしょう」
　王は、「宝玉を抱えたまま、決して離そうとしない」と言ったけれど。それほど力が強いとは思えない皇后の腕から、力ずくで宝玉を取り上げることも出来ないことではないはずだ。そして、その宝玉が何らかの悪しき物だと考えるなら、そうすることにそれほどの躊躇いもないだろう。それなのに、彼はそうしなかった。いや――多分、出来なかったのだ。
「私が知り得たいくつかの伝承によると、妖魔はよく、宝玉に魔法を込めてそれを使ったんだそうです。そしてまた、妖魔が人間を魅了してその人間を堕落させるという話も、聞いたことがあります」
　巨大な貴石に魅了の魔法を込め、人間に持たせて堕落させるなんて、人間の魔法使いには出来ない――彼らの限りある魔力で、出来ることではない。
　そもそも、魅了の魔法は制約の多い魔法なのだ。魔法使い達は、対象となる人間に直接触れるか、もしくは目を合わせるかといった何らかの接触がなければ、この呪文の力を発揮ことすら出来ない。それに、たとえ魅了できたとしても、心を支配し、束縛するのは更に難しいのだ。
　けれど話を聞く限り、皇后はもう随分とその宝玉に心を奪われてしまっているようだ。妖魔の強大な魔力によってかけられた魅了は、今や皇后の奥底に深く根差し、彼女の心の大半は妖魔の宝玉に支配されているのだろう。無理にでも引き離そうとすれば半狂乱になって暴れ、それでも力ずくで取り上げれば、本当に発狂してしまいかねない程に。
「多分、王の明敏な感覚は本能的にそれを感じ取っていて、だからこそ、皇后と宝玉を引き離せなかったのでしょう」
　シリルの返事に、ケヴィンは苦虫を噛み潰したような表情になった。額に手を当てて、天を仰いで見せる。
「うわぁ、まずいなぁ。俺、何とかするって王に約束しちゃったよ……勝てるか？」
「何、言ってるんですか。負ける気なんてないくせに」
　ケヴィンらしくない弱気な言葉を、けれどシリルはそう言って一蹴した。自分の尊敬する師匠は、こんな時、無意味に悲観的になるような人ではない。呆れたような表情で肩を竦めたシリルに、ケヴィンはニヤリと笑って応える。
「俺とお前の二人がかりだ。負けるわけないだろ？」

口にするのは、さっきとは正反対の言葉。
「えぇ、きっとそうですね」
答えた言葉は、シリル自身にさえ心にもない科白のように聞こえた。
相手が下級妖魔ならば、もしかすると勝てるかもしれない。けれど、もしも上級妖魔だったら？　考えて、シリルは心の中で首を振った。最悪の事態ばかりを連想しても、仕方がない。

優美な細工が施された両開きの扉は、今はぴたりと閉じられていた。王宮の中でも、奥まった一角。皇后の夏用寝室として案内されたのは、広い中庭に面した一室だった。大きな噴水のある中庭から涼しい風が通るように設計されたその部屋は、けれど今は全ての窓を閉め切り、不気味な沈黙に沈んでいる。明るい昼の光の中にあって、そこだけが影の中に沈んでいるような陰鬱な雰囲気を湛えていた。
扉まであと十メートル程の所まで来て、ケヴィンは立ち止まった。振り返って、背後に立つ王に視線を合わせ、何度目かの説得を試みる。
「ここから先は、私たち二人に任せて頂けないでしょうか」
ケヴィンの懇願めいた口調に、けれど王が心を動かされた様子はなかった。
「いいえ。お願いです、私も共に行かせてください」
きっぱりとそう言った、彼のその瞳に宿る光が、彼がその意志を翻すつもりのないことを何よりはっきりと示している。
シリルはケヴィンと顔を見合わせ、心の中でそっと溜息を吐いた。ここに至るまでに、既に五回ほど、同様のやりとりが交わされていた。だが、王の意志は変わらない。
少年王の表情からは、午前中に見せた不安定さは既に形を潜めていて。再び二人の前に姿を見せた彼の口調も態度も、王として充分に相応しい、穏やかで慇懃なものに戻っていたけれど。充分に冷静になれているとは、とてもじゃないけれど思えない。
何度も、説明したはずだ。とても危険な闘いになる可能性が高い、と。だから、宮仕えの人達にも退避してもらったのに。少年の真摯な瞳に映る決意が、母を想う彼の気持ちから出ているのだと、分かってはいるけれど。
いっそのこと、無理にでも戻ってもらおうか、とも思う。追いかけて来られても厄介だけれど、それこそ魔法を使えば、しばらくの間そこから動けなくさせることだって出来る。だが、シリルはその自分の考えに首を振った。闘いの前に魔力を無駄に消費するのは賢いことではないし、それに――もしも自分たちが負けたとしたら、彼から自由を奪ってしまうのは自殺行為だ。野放しにされた妖魔がどう暴れるか、想像もつかないのだから。
ケヴィンも同じことを考えたのだろう。ひょい、と肩を竦めて、少年に問いかける。
「何があっても、私たちを信じると、約束していただけますか？」
「はい」
決然と頷いて見せた王に、はぁ、と息を吐いて。
「分かりました。では、決して私たちの元を離れないようにして下さい」
諦めたような口調でそう言ったケヴィンの表情には、強い覚

悟が浮かんでいた。

優美な蔦模様で飾られた扉を開いた瞬間、目に飛び込んだ光景に、シリルは息を呑んだ。

大人が三人は並んで横になれるほどの大きな天蓋付きの寝台は、レースの掛け布も光沢のあるシーツも無惨に剥がされ、一部、その内側の無粋な骨組みをあらわにしている。元はピカピカに磨き上げられていたのだろうシャンデリアには埃が積もり、このところの暑さで何かが腐っているのか、締め切られていた室内にはムッとする熱と腐臭と黴臭さが充満し、シリルの鼻を衝いた。

だが、それより何よりシリルを驚かせたのは、部屋の中央、寝台に寄りかかって床に座り込んでいる一人の女性だった。ぼさぼさに乱れて顔を覆う、艶を失った髪。頬が痩け、眼窩が落ち込んだ顔。乾いた唇はへの字に曲げられ、青白いを通り越して土気色に見える肌は、いくらか黒ずんでさえいる。

状況からすれば、彼女が皇后ミリアであることに間違いない。だが、そのあまりの変貌ぶりに、シリルは思わず我が目を疑った。今の彼女の姿に、美しく朗らかだったかつての面影は、欠片も見いだすことが出来ない。

「母様……」

そう呟いて前に出ようとした王を、ケヴィンが後ろ手に抑える。

その時、彼女が閉じていた瞼を開いた。緩慢な仕草で何度か瞬きをし、こちらに目を向ける。だが、彼女の視線はまるでそこに空気しかないように彼らの上を通り過ぎた。自分の手元まで視線を戻し、にこり、と笑う。この世でただ一つの宝物を見つけたような、まるで無邪気にも見える表情。けれど、その微笑みはどこかひどく虚ろで、シリルはぞくり、と背筋が粟立つのを感じた。

彼女はそのしなびた掌で、手元にあるそれを愛おしそうに撫で回している。ひからびたような指の隙間から、滑らかな薄紅色の球体を見て取って、シリルは唇を噛んだ。それが、例の宝玉であることは明らかだ。半透明のその宝玉には疵一つなく、開け放たれた扉から差し込む明かりを受けて、幻想的な光をその内部に宿している。それは確かに人を惹き付けずにはいられない、不思議な美しさを湛えていたが、一方で、そこから放たれる意志を持った魔力に、シリルは目眩を覚えた。

「やっぱり、か？」

宝玉から目を離さずに問いかけるケヴィンに、無言で頷く。放たれる魔力から、それがただの美しい紅水晶ではないのは明らかだ。宝玉に魔法を込めるのは、妖魔の手口。だが、それより何より、そこから放たれる魔力の意志が、これが妖魔の手に成る物であることを示していた。見る人を惹き付けて止まない、魅了の魔法――だがその根底には、人間に対する残忍なまでに強い憎しみが溢れている。

「壊すしかない……か」

呟くようにそう言ったケヴィンに、シリルも宝玉から目を離さずに答える。

「はい。浄化は無理でしょうから」

これほどの憎しみを、浄化できるとは思えない。ミリア皇后を助けたいなら、取るべき手段はただ一つ。宝玉の破壊だ。

「母様！」
その時、少年が上げた悲鳴にも似た声に、シリルは慌てて視線を上げた。途端、皇后のぎらぎらとした視線とぶつかる。先程まで半ば眠るようにとろん、としていた彼女の瞳は、今やあからさまな敵意と怒りを示している。宝玉をしっかりと胸に抱え直すと、皇后は素早い動作で立ち上がった。先程までの緩慢な仕草とは、あまりにも違う動き。表情といい、まるで別人だ。
その時、ケヴィンが動いた。彼女の動きを制するように正面に回り込む。
「その宝玉が、そんなにお好きですか？」
問いかけに対する返事はない。だが、ケヴィンはそのことを気にする素振りも見せず、あくまで飄々とした口調で話し続けた。
「皇后様なら、美しい物をたくさん知っておいでだと思うのですが。その宝玉、確かに綺麗ですが、この世で一番、というほどの物でもないと思いますよ」
言い終わった途端、皇后の表情が変わる。ぎらぎらとした敵意は増幅し、怨嗟の唸り声と共に、彼女は歯を剥いてケヴィンを睨みつけた。その顔はひどく醜く歪み、面変わりしたその顔つきとも相まって、まるで妖魔そのもののように恐ろしい。シリルの背後で様子を見守っていた王がびくり、と震える。
だが、皇后のそんな様子にも、ケヴィンは動揺した様子を見せなかった。先程までと変わらず、あくまで穏やかに問いかける。
「それは、良くない物なんです。お願いですから、こちらに渡して頂けませんか？」
ケヴィンの懇願を、だが、皇后が聞き入れそうな様子はない。相変わらずケヴィンを睨み、噛み付かんばかりに威嚇の声を上げる彼女に、シリルは思い切り嘆息した。こうなることは、確かに、充分に予測できたことではあったけれど。お陰で、王の前で最もしたくないことをやらなくちゃいけない。
「無駄ですよ」
溜息混じりの言葉を、口にする。訝しげにこちらを見やったケヴィンに、シリルは言葉を続けた。
「皇后陛下は、もう完全にその宝玉に取り憑かれておられるようですから。無理に引き離そうとしたって、無駄ですよ。仮に出来たとしても、無事で済むとは思えません」
言いながら、ちらり、と皇后を見やる。宝玉を抱えながら、油断なくこちらを注視する彼女の様子に、けれどシリルはそれほど注意を払う素振りも見せず、もう一度ケヴィンに視線を戻した。
「じゃあ、お前はどうするって言うんだ？」
険しい表情で問いかけるケヴィンに、努めてさらりと答える。
「死んで頂くしか、ないでしょうね。更なる被害を、未然に防ぐためにも」
「そんなっ」
背後で上がった悲痛な声に、シリルはくるりと少年に向き直った。努めて無表情を保ったまま、言葉を続ける。
「では、どうしろと言うんですか？　皇后陛下はあれを手放そうとしない。無理に引き離したとしても、結局は同じこと。このままでは、あれを壊すことは出来ません。まさか、このまま放っておけと言うおつもりですか？　妖魔に取り憑かれた者を

放っておいて、被害が拡大するのを指を咥えて見ていろ、と？随分と無責任な国王陛下ですね」

突き放すような冷たい口調は、充分に意識した上でのこと。泣きそうに歪んだ少年の顔に、心がズキリ、と痛む。だがそれでも、シリルは怯んだりはしなかった。ここで、彼の希望を聞いてあげるわけにはいかないのだ。今にも涙が溢れそうな少年の顔を、正面から見据える。

先に視線を逸らしたのは、少年の方だった。シリルの視線を避けるように目を伏せ、次いで、縋るようにケヴィンを見つめる。

少年の視線を受けて、ケヴィンはひどく困ったような表情をした。眉を八の字にしたまま、おずおずと口を開く。

「シリル、その、他に方法は……」

「あるのだったら、こんなこと、言うわけがないでしょう」

ケヴィンに視線を向けることすらせず、シリルは即答した。他にやり方があるのなら、こんなやり方を採ったりしない。

「お前がそう言うなら、確かにそうなんだろうが……。だがこれでは、あまりに陛下がお気の毒で……」

溜息混じりに、それでもそう言い募るケヴィンに、シリルは静かに首を振る。

「先生がそう言われるのなら、止めましょうか？　他の方法を提案して頂くか、もしくはこのまま何もせず、それで私達の任務が果たせると言うのなら」

シリルの言葉に、けれどケヴィンはそれ以上、言葉を返そうとはしなかった。唇を噛んだその表情は、彼が納得していないことを示しているけれど。それを見て、シリルもまた、それ以上は口を開かない。こんなこと、納得出来るはずないのだ。

ちらり、と少年に目をやる。聡明な少年は、状況を理解し、蒼白な顔でシリルの傍に立っていた。堪えきれない涙は溢れ、身体中がぶるぶると震えている。だがそれでも、少年は泣き喚いたり、ましてシリルの前に飛び出そうとしたりはしなかった。ただ黙って、今から起こるであろうことに耐えようとしている彼の姿に、シリルは少し感心する。どれほど年若く未熟であっても、やはり彼は、この国の王なのだ。

無言のまま、シリルは皇后に視線を移した。ケヴィンに目配せすると、杖を取り出し、静かに呪文を唱え始める。

直後、それまで寝台の脇から動こうとしなかった皇后が勢いよく動いた。シリルに向け、猛烈な勢いで突進する。咄嗟のことに対応できず、思わず身体を硬くしたシリルの元に、だが、彼女が届くことはなかった。突進はすんでのところで止まり、そのままずるずると後退する。ケヴィンが背後から彼女に組み付き、そのまま羽交い締めにしてシリルから引き離したのだ。

視線だけでケヴィンに感謝を示すと、シリルは皇后に視線を合わせながら呪文の詠唱を続けた。決して、特別な魔法ではない。だが、どれほどありふれた魔法であっても、魔法というのは、使い方次第で恐ろしい効果をもたらす。

呪文の詠唱が始まっても、最初、皇后の様子には何の変化も見られなかった。身体に傷が付くわけでも、苦痛に悶えるでもない。だが、呪文が続くにつれて、彼女の様子は少しずつ変化した。ケヴィンの手から逃れようと暴れていたその動きは徐々に鈍くなり、その口から絶えず漏れていた唸り声は途切れ、カッと見開かれていた目を、重い瞼が覆う。やがて十分も経った

頃には、彼女は抵抗どころか身動き一つしなくなった。いや、出来ないのだ。身体をぐったりとケヴィンに預けるその姿に、もう生命のきらめきは見えない。

彼女が目覚めることのない眠りに入ったことを確信して、けれどそれでも、シリルは呪文の詠唱を止めようとはしなかった。ピン、と張りつめた、痛いほどの静寂の中。僅かに残った息の根さえ押さえ込むように、鎮魂歌にも似た呪文が唱うように続く。

更に十分ほども詠唱を続けた後、シリルはようやく呪文を止め、右手に持った杖を下ろした。その途端、脇を駆け抜けて母の元へ駆け寄ろうとした王を、シリルは後ろ手に制する。自分を睨み上げる少年の涙を溜めた目を見ることなく、シリルは落ち着いた口調で少年に告げた。

「入らないで。ケヴィンがこちらに運んでくれますから」

動かなくなった皇后の脇に跪くと、ケヴィンは両腕を差し込み、その身体を抱え上げた。彼女の手元にあった玉がコロコロと床に転がるのを気にする素振りすら見せず、扉の所で待つ王の元へ運ぶ。

駆け寄る王を、今度はシリルも止めようとはしなかった。ケヴィンの手によって皇后が彼女自身の寝室から離れ、王と共に廊下を進んでいくのを黙って見送る。今となっては、彼女を安置する場所としてこの寝室ほど相応しくない場所もないだろう。

後ろ手に扉を閉めると、シリルはふぅ、と息を吐いた。とりあえずの首尾は良し。だがこれで、全てが終わったわけではない。

部屋の中央にほど近く、無造作に床に転がっている薄紅色の宝玉を見やる。毛足の長い絨毯に沈む、大きな紅水晶。あれを破壊できなければ、今までのことは何の意味もないのだ。

短い呪文を唱え、左手に魔力を集中させる。紅水晶は、決して脆い石ではない。その上、この宝玉には強力な魔法が込められている。だがそれでも、シリルはこの玉を叩き壊せる自信があった。自分の魔力を持ってしても壊せない物など、そうはない。それに多分、この宝玉には障壁の魔法も守護の魔法もかけられてはいない。随分と強力な、魅了の魔法。だが、この石から感じられる魔力はそれで全てだ。

練り上げた魔力の塊を宝玉にぶつけようと、シリルが左手を振り上げた、その刹那。

背後にぞくりとするような何かの存在を感じて、シリルは慌てて飛び退った。直後、耳障りな声が耳朶を打つ。

「おいおい。まさか黙って壊させてやると思ってるんじゃないだろうな？」

そう言った相手の姿を見て、シリルは息を呑んだ。影のように全身が黒に覆われているその姿は、悪意のこもった人間の醜いカリカチュアのようだ。二本の腕と二本の足、胴体の上に首が乗ったその姿は、それだけを見れば人間に似ている。だが、関節の見あたらない手足や奇妙に滑らかなその輪郭が、その存在が明らかに人間ではないことを示していた。

いつの間に、この部屋に入ってきたのだろう。そう考えたシリルは、けれど次の瞬間、妖魔の足下に気付き、恐怖と共に自分の考えを否定した。締め切られた薄暗い部屋の中にあって、異様なほどに濃い寝台の影。妖魔の身体は、その影とまるで一体であるかのように繋がっている。奴はきっと最初から、影の

中に潜んでいたのだろう。いや、潜んでいたという表現は妥当ではないかもしれない。この妖魔は、影そのものなのだ。
「お前、本当に人間か？　上の奴らが人間に化けているんじゃないだろうな」
そう言いながら、疑い深い目つきでこちらの様子をうかがう妖魔に、シリルは思わず苦笑した。その醜悪な姿形からして、彼が下級妖魔であることに間違いはないだろう。見るもおぞましい姿を持つ、下級妖魔。だがそれに対し、上級の妖魔は皆、まるで人間と変わらない姿をしているという。
「そうだ、と言ったら信じるとでも？」
問い返したシリルに、妖魔は用心深い目つきを向ける。見開いた目をぎょろり、と動かしながらシリルを観察していた妖魔は、だが、すぐに首を横に振った。
「いいや。信じねぇよ。そんなに弱っちい上の奴なんか、いるもんか」
吐き捨てるような口調で、そう言ってのける。それから、彼は唐突に嗤い出した。
「だが、それじゃあやっぱりお前は人間なんだな？　これは驚いた。最近じゃあ、人間が人間を殺すのに、大した躊躇いもないのかい。まるで妖魔並だな」
耳障りな声で嗤い続ける妖魔を、シリルは怒りのこもった目つきで睨み付けた。そもそもこいつが全ての元凶であることは、その纏う魔力にも明らかだ。宝玉に込められた魔力と、全く同じ特徴を持つ魔力を纏っているのだから。
呪文を唱え、左手に集めた魔力の塊に更なる魔力を注ぎ込む。肥大していく魔法の弾を見て、けれど妖魔は更に嗤って見せた。
「俺とやろうってのかい？　それこそ無駄ってもんだ。あんたさっき、随分魔力を無駄遣いしてたからなぁ。俺と戦えるほど、力が残ってるとは思えねぇぞ」
「そんなこと、やってみなければ分からない」
胸の内とは裏腹の冷めた声音でそう言うと、シリルはそれ以上、口を開こうとはしなかった。黙って間合いを詰めるシリルに、妖魔は逃げようとする素振りすら見せない。
最後の数歩分を駆け足で詰めながら、シリルは左手を振り上げた。振り下ろすと同時に放たれた魔力弾は、狙い過たず真正面から妖魔に迫る。だが、破壊的な力を持つ魔力の塊が触れようとする、その直前。妖魔は、すっと身体を沈めた。そのままするりと影に潜り、寝台の傍まで影を伝って移動する。そこで再び立体となると、妖魔は魔力弾が空しく床をえぐるのを見て、耳障りな声で嘲笑った。
「だから言っただろう？　無駄だ、って」
そう言う妖魔の赤い口が、残忍な愉悦に歪む。けれど。
「そうか？」
その背後から聞こえたのは、シリルの声ではなかった。
驚いた妖魔が、振り返るよりも前に。ケヴィンの創り出した魔法の刃が、その身体を両断した。

# 第十章　破壊〔後〕

紅水晶がガシャン、と音を立てて割れ、更に粉々になるまで破壊されるのを見届けて、シリルはほっとして師の顔を見上げた。皇后を適当な場所へ移動させた後、王と皇后をその場所に残し、急いでこちらに駆けつけたはずのケヴィンは、妖魔一匹斬り捨てても息を乱す様子もない。

「何とか、間に合ったな」

「はい」

いつも通りの飄々とした口調でそう言ってのけたケヴィンに、頷きながら答える。

薄暗かった部屋は、妖魔が悲鳴を上げて倒れた瞬間、嘘のように明るくなった。高い所に取り付けられたいくつもの窓から、明るい陽射しが降り注いでいることに、改めて気付く。覆いのない窓は、ずっと同じく光をこの部屋に投げ入れていたはずなのに。あの薄暗さも、妖魔の仕業だったのだろうか。

ケヴィンに斬りつけられて倒れた妖魔は、けれどそのまま、再び影に沈んでしまった。今も現れて来ないところを見ると、どこかに逃げ出したのだろうか。もしかすると、そのまま死んでしまったのかもしれない。たが、相手は妖魔だ。そう思い込むのは、きっと愚かというものだろう。けれど実際のところ、シリルは妖魔の安否に大して興味はなかった。少なくとも、奴の魔力はもう感じられない。そう簡単に復活できるような傷でもない。とりあえずは、それで充分だ。

「さて。残る課題は一つだけだな」

ケヴィンの言葉に、シリルは思考を中断した。涙を溜めた王の顔が、脳裏に蘇る。いつも穏やかな微笑みを湛え、滅多なことでその表情を崩すこともないと言われる少年王が、今日は何度顔を歪め、涙を零しただろう。

シリルはほう、と溜息を吐いた。思いを振り切るように、首を振る。傷ついた王の顔を、もう一度見なければならないと思うと、少し気が重いけれど。それでもこれだけは、避けられないことだから。

「お二人がおられる場所を、教えてください」

シリルの言葉に、ケヴィンは黙って頷くと、前に立って歩き出した。

二人がその部屋に入ると、王はのろのろと顔を上げた。その顔には、もはや何の感情も浮かんではいない。涙すら、流れてはいなかった。力のない目で二人を認めた少年は、力のない言葉で問いかける。

「どう、なりましたか？」

「始末しました」

ケヴィンの短い報告に、王はただ、「そう」とだけ呟いた。取って付けたように、言葉を添える。

「お二人とも、ご苦労様でした」

言い終えて、彼は再び顔を元に戻した。客用寝室の寝台に横たえられた母親の顔を、じっと見つめる。醜く変貌して見えた皇后の顔は、けれど、衣服を整えられ、髪を撫で付けられ、こうして穏やかに目を閉じていると、かつての美しさを僅かに取

り戻して見えた。疲れ切ってやつれてはいるが、今はもう、決して恐ろしくはない。

その額にかかった髪を優しくかき分け、王は再び口を開いた。

「こうしていると、まるで眠っているみたいじゃないですか？」

それは、先程までの力のない声ではない。静かな、けれど悲痛な響きを持った王の声は、物理的な痛みを伴ってシリルの耳を打った。

「死んでいるなんて、とても思えません」

動かない母の手を取り、その甲を撫でる。その仕草の優しさは、彼が母に対して大きな敬意と愛情を共に抱いていたことを、この上なくはっきりと示していた。

「どうせなら、目に見える形で殺して下さったら良かったのに」

少年が漏らした溜息混じりの呟きは、あまりにも悲しい。その言葉が伝える痛みに顔を俯けて、けれど、シリルは静かに首を振った。

「それでは、本当に死んでしまいます」

シリルの言葉に、少年は眉を顰める。

「何を言っているんです？　母は、もう死んでいます。息もしていないし、心臓だって動いてはいない」

その声は、半ば怒りを帯びている。それはきっと、当然のことだろう。それを充分に分かっていて、それでもシリルはもう一度、静かに首を振った。

「少しだけ、待っていて下さい」

そう言うと、答えを待たず、魔法の旋律を口の端に乗せる。

皇后の額に手を乗せると、ひんやりとした感触がシリルに伝わった。

皇后の意識は、深く深く沈み込んでいる。それはまるで、死と同様に定義されるほどに。けれど、決して死んではいない。シリルがかけた魔法は、ただの誘眠の魔法でしかないのだから。

誘眠の呪文は、人の意識をその内側に追いやる。普通ならばそれは、誰かに揺り起こされれば浮上してしまう程度の深さでしかない。けれど。

実際のところ、意識をどれ程の深さまで沈ませられるか、それを決めるのは魔法使いの力量だ。魔法を操るのに器用な者は、その深さをそれだけ細かく調整出来、魔力が強い者はそれだけ深く沈ませることが出来る。――そして。シリルの魔力は、魔法使いの中でも群を抜いて強大だ。

深く沈んだ皇后の意識を、ゆっくりと引き上げる。元々混乱していた彼女の意識を、出来るだけ刺激しないように。意識の急浮上は、それでなくとも混乱を招きやすいから。

「母様……？」

僅かずつ、でも確かに戻ってくる温もりに、少年は驚きの声を上げた。母の手を握っていた手に、力を込める。その手首に確かな鼓動が戻っているのを知って、少年は目を見開いてシリルを見上げた。

「本当に……生きて……？」

少年の視線を受けて、シリルはにっこりと微笑む。皇后の意識が充分に浮上したことを確認して呪文を止めると、掌をその額から外し、信じられないという面持ちでこちらを見上げている少年に向き直った。

「生きていらっしゃいます。少しの間、眠っていただいていただけ。陛下、お願いです。皇后陛下を、呼んで差し上げて下さ

い。いつも、お呼びになっているように。陛下の声で、目を覚まさせて差し上げて下さい」

少年は、横たわる母に目を移す。その姿勢は先程から変わらず、ピクリとも動いていない。だが、青白かった頬に僅かに赤味が射し、何よりその胸がゆっくりと上下しているのを見て、彼はもう一度、母の手をぎゅっと握った。恐る恐る、口を開く。

「母様……眠っていらっしゃるのですか？　起きて下さい、母様！」

握った手が僅かに動いた気がして、少年は慌てて母の顔を見やった。見開いた目に、じわり、と涙が浮かぶ。けれどそれは、悲しみの涙ではない。

ゆっくりと、瞼が上がる。落ち窪んだ眼窩の奥に、紛れもない生命の光を宿した瞳を見出して、少年はポロポロと涙を零しながら母の胸に飛び込んだ。

熱いお茶が喉を通る瞬間、鼻腔に広がった芳しい香りにこの上ない幸せを感じて、シリルはふわり、と微笑みを浮かべた。

強い陽射しと熱を地上に投げかけていた太陽は既に西に傾き、夕方の少し肌寒い風が吹き抜ける中、熱いお茶はそれだけでひどく贅沢な飲み物のように感じられる。まして、今シリルが口をつけているのは、国内でも最高級のリラ茶だ。

「皇后陛下は、これからどうなるんだ？　あのまますぐに元通り、となるわけにはいかないだろう」

口に含んだ熱いお茶をごくん、と飲み下して、ケヴィンは首を傾げながらシリルに問いかけた。

二人は、最初に案内された王の私室に腰を落ち着いていた。

当のアベル二世は母親のことで典医と話をするために席を外しており、今はシリルとケヴィンの二人だけが、夕陽に照らし出された美しい庭で目を楽しませ、熱いお茶で喉と鼻を楽しませる贅沢を甘受している。

「ええ。すぐに元通りに、ということは難しいと思います。妖魔の宝玉は、皇后陛下の心の中に、かなりの場所を占めていたようですから。でも陛下には、支えようとしてくれる人も慕ってくれる人もいます。きっと数ヶ月も経つ頃には、元気を取り戻されていると思いますよ」

シリルの言葉に、ケヴィンがほっと息を吐いた、その時。静かに開いた扉から覗いた顔に気付いて、二人は立ち上がった。

「母は、大丈夫なようです。お二人とも、本当にありがとう！」

満面の笑みを浮かべてそう言った王を見て、シリルもまた、心の中でほっと息を吐いた。少年の顔に戻った笑顔が嬉しい。

二人に対面する椅子に腰掛け、運ばれてきたお茶を一口含む。それから少年は、穏やかな笑みを浮かべたまま、僅かに首を傾げて見せた。

「ところで、質問してもよろしいですか？　何故、あんなことを？」

王の質問に、シリルとケヴィンは気まずい表情で顔を見合わせた。その疑問は、確かにもっともだ。彼にしてみれば、皇后を仮死状態に追いやったことの意味など分からないだろう。もしかすると、母の命を使った笑えない冗談にしか思えないかもしれない。

王の方に向き直ると、意を決したようにケヴィンが口を開いた。

「理由は、二つあります。一つめは、浅い眠りでは意味を持たない可能性があると考えたからです」
　この王宮の人達は、少なくとも二週間、あの宝玉を皇后から引き離そうとしていたはずだ。その間に、眠っている間に宝玉を奪う、という手段を試していないとは考え難い。
　ケヴィンの説明に、少年はなるほど、と頷いて見せる。
「そうですね。確かに、母が寝ている間に奪ってしまおう、と考えたこともあります。でも、母が目を覚ますよりも前に宝玉をその腕の中から奪うことは出来ませんでした。あなた方のやり方は理に適ったことだったのしれません」
　にっこりと笑ってそう言った王の表情に、けれど、納得した様子はない。
「それで、二つめの理由というのは？」
　穏やかな表情のまま、けれど眼光だけは鋭くこちらを見据える王は、先程までの泣き虫の少年とはまるで別人だ。あまりの変貌に冷や汗を浮かべながら、シリルは言葉を継いだ。
「二つめは、妖魔を誘き出すため、です」
　最近は目撃されることが増えたとは言え、基本的には、やはり多くの妖魔は人前に姿を現したがらない。単に眠らせた後に奪った宝玉を破壊しようとしても、おめおめとは出て来ない可能性もあったのだ。だが一方で、彼らは残忍な行為を好む。自分のせいで人間が人間を殺したと思えば、得意になって姿を現してもおかしくない。
「つまり、私の母を囮に使ったと？」
　微笑みを浮かべた、その穏やかな表情とは裏腹に。投げかけられた科白に、二人は硬直する。
　そんな二人の様子が可笑しかったのか、王はくすくすと声を立てて笑った。
「大丈夫ですよ。怒っていない、とは言いませんが。元はと言えば、評議会の方がこの件で力を貸して下さったのも、妖魔が関わっているためでしたね。その妖魔を誘い出すためだったとあれば、仕方のないこと。私の母も納得するでしょう」
　笑い続ける王を前に、もう一度顔を見合わせて。シリルとケヴィンは、この聡明な少年王に対して、深々と頭を下げた。
「さて。ここでお別れだ。俺はレグルに帰らないといけない」
　王宮から街道に出た所で、ケヴィンに唐突にそう言われて、シリルは驚いて顔を上げた。
　この街道を西に向かえばレグルに、東に向かえばシリルが庵を構えるニールの外れに行き着くことになる。確かにこの都からレグルに向かうには、ここで街道を西に向かうのが一番早いけれど。
「もうすぐ、日も暮れてしまいますよ。私の庵は狭いですが、せめてもう一晩、泊まって行かれませんか？」
　太陽はもう西の山の端にかかっている。これからレグルに向かっても、いくらも行かない内に夜になってしまうだろう。それに何より、もっとケヴィンと話をしたい。レグルを離れて経験した、色々な出来事、出会った人々……聞いてもらいたいことは、たくさんある。昨夜は早々に寝てしまって、ろくに話も出来なかったのだから。
　だが、ケヴィンは笑って首を振った。
「済まないが、もう帰るよ。仕事が立て込んでいるんだ」

「でも、先生、馬は」
すぐにも立ち去りそうな様子のケヴィンに、シリルは慌てて呼び掛ける。ケヴィンがシリルの庵まで乗ってきた馬は、今はニールの宿の厩に預けてあった。シリルの庵からこの都までは、魔法の翼を使ったのだ。
けれど、シリルのその問いかけにも、ケヴィンに慌てる様子はなかった。ニヤリ、と笑うと指笛を吹く。途端、聞こえてきた馬の嘶きと蹄の音に、シリルは自分の耳を疑った。街道を東から現れたのは、紛れもないケヴィンの馬だ。
「こいつは、俺とは長いつきあいだからな」
目を丸くしているシリルにそう言って、ケヴィンはひらり、と馬にまたがる。それから彼は、名残惜しそうに自分を見上げるシリルに向かって、優しく声を掛けた。
「お前が立派にやってるのが分かって、嬉しかったぞ。だが、あまり無茶はするなよ」
言って、くしゃりとシリルの頭を撫でる。
「それから。俺のこと、もう『先生』と呼ばなくても良いぞ。お前はもう、一人前だ」
真剣な表情でそう言ったケヴィンに、だが、シリルは首を振った。
「先生は、先生ですよ」
そう言って、にっこりと笑う。
そんなシリルの表情を、ひどく嬉しそうに見て。けれど何も言うことなく、ケヴィンはそのまま馬の首を返した。沈みかけた太陽の赤い光に染まった街道を、西へ。長く伸びた影に、もう、妖魔は居ない。
「お元気で！」
背中に向かって大きな声で叫んだシリルに、ケヴィンは振り返ることなく、左手を挙げて応えた。

――さて。以上が、シリルが影に潜む妖魔と最初に出会った時の話じゃ。思いの外、長い話になってしまったの。
妖魔というのがどういう存在で、本当は何を求めておるのか、知っておる者はおらん。今回の話にしても、それは同じじゃ。あの影の妖魔が何故皇后を魅了し、その結果として何を求めておったのか、結局、それを知ることは出来なんだ。単に一人の人間の堕落が見たかったのか、それとも支配者を魅了することでツェリアの支配、あるいは荒廃を狙ったのか……シリルの奴も、色々と考えてはみたようじゃがな。
じゃが少なくとも、こういう事件を見聞きする限り、人間にとって、妖魔というのはあまり仲良く出来る相手とは思えんのう。もっとも、それも相手を知らんことによる偏見なのかもしれんが。
――ふう。少し喋り疲れたわい。今日はここまでにさせてもらおうかの。

# 第十一章　目立たない

何故、シリルがここに庵を結ぶことになったのか、確かまだ話しておらんかったの。

ああ。確かにここは奴の故郷に近い。それもまた、ここを住処として選んだ理由の一つじゃ。じゃがそれだけならば、故郷であるニールに住めば良いことじゃろう？　わざわざ、こんな不便な場所に庵など作らなくてもな。

ここに庵を結んだのは、シリルなりの理由があるのじゃよ。そうじゃ、今からその話をしてやろう。あれは、シリルがここに庵を結ぶ前。レグルを出てから、数年は後のことじゃ――。

早朝の清澄な朝陽を浴びて、シリルは街道の真ん中で思い切り伸びをした。

昨夜まで潜んでいたリンドの国から、まだ徒歩で一時間程しか離れていないというのに、支配している王権が違うというだけで、空気というのはこうも変わるものだろうか。

魔法使いの存在を忌避し、その入国を拒絶しているリンド。自分の力を隠匿して潜むことの息苦しさを差し引いても、その国の空気はどこか重苦しく、シリルは結局、最後まで馴染むことが出来なかった。興味深い遺跡が、ほとんど手つかずのまま、あちこちに散在していることを知らなければ、きっと一日だって滞在しようとは思わなかっただろう。

リンドからミドグリアに入ったばかりのこの場所を、歩いている人は少ない。夜が明けてからまだ一時間も経っていないこともあり、シリルの周囲では専ら隊商ばかりが列をなして進んでいた。

――さて、と。これからどうしよう。

そもそも、リンドまで足を伸ばしたのは、探し求めて止まない一人の女性の足跡を求めてのことだ。けれど結局、その件に関して得られた手がかりはほとんどなかった。有益な情報が全く得られなかった、というわけではないから、無駄足だった、とは思わないけれど。

これ以上、やみくもに歩き回っても、きっと収穫はないだろう。魔法都市レグルを出て数年、ミドグリアからリンドを回り、その各地に手がかりを探したけれど、遂にそれを得ることが出来なかった。見て回った中で、唯一、彼女の持つ雰囲気と共通する何かを感じた、と思えたのはリンドだったけれど、だからといって具体的に何かの指標が導き出せたわけではない。

何にせよ、知らないことが多すぎることを、シリルは痛感していた。アルキミアを探そうにも、その名が彼女の本名なのかすら知らない。彼女が向かったはずの妖魔の国を見つけようにも、妖魔の何たるかすら、自分は分かっていない。もちろんその辺りの人よりは詳しいはずだし、特に熱心に勉強した分、魔法使い達の中でもかなり知識はある方だとは思うけれど。それだけでは、何の役にも立たない。

結局、どこかに腰を据えて、きちんと研究する必要がある、ということだ。この旅の中で得られた知識を体系付けるための基礎的な概念が、シリルには圧倒的に足りない。一般に纏めら

れた知識でなく、知られていない知識を掘り起こさなくては。
――一度、戻るしかないか。
そう考えたところで、シリルは、はたと立ち止まった。自分はここから、どこに戻るのだろう？　今も師の暮らす、レグルだろうか。そうすれば、師はきっと歓迎してくれるだろう。レグルの評議会は即座に、研究のために必要なあらゆる環境を整えてくれるに違いない。またあの居心地の良い家で、敬愛する師と共に暮らす、というアイデアは、かなり魅力的だ。出戻るみたいで、少し格好悪いけれど。
いっそのこと、故郷に帰ってみようか。魔法使いへの偏見が強い故郷の村は、それでも帰ってきた者を追い出すような真似はしないだろう。いや、むしろ若いシリルが戻ることを、村の人達は喜んでくれるに違いない。ただし、魔法、という言葉は、見ない振りをして。その様子が容易に想像できて、シリルは一人、苦笑した。それはそれで、楽しいだろうと思う。シリルの研究を邪魔しようと思う者も、きっといない。彼らは皆、魔法使いを恐れているのだから。
だが、そう考えてみても、シリルの心は弾まなかった。レグルに帰るにしても故郷のニールに帰るにしても、何か同じものがシリルの気持ちに引っかかっている。それが何なのか、シリル自身にも、良く分からないけれど。
――でも、そろそろ決めないと。
今いる街道はフォーリア山脈に沿って大きく湾曲し、間もなくルチアに入る。そのままルチアを斜めに横断すれば、その先はツェリアだ。レグルに向かうなら、あと数日の内には街道を北西に逸れなくてはならない。
シリルはふう、と息を吐いた。知らず、顔が俯き加減になる。自分は一体、何がしたいのだろう？　いや、したいことは決まっているのだけれど。
乾いた風に吹かれ、カサカサと音を立てながら転がる木の葉を何となく目で追う。もう、季節はすっかり秋だ。道端に生える草も、すっかり秋模様に変わっている。
と、突然。
「ねえ、あんた、ちょっと来て手伝って！」
そう声をかけられると同時に、ぐい、と二の腕を引っ張られて、シリルは驚いて顔を上げた。一人の中年の女性が、シリルの腕を引いている。先程まで、シリルの周囲には隊商の馬車しかいなかったのに。いつの間に、彼女はここに現れたのだろう？　いや、それより何より。
「あ、あの、手伝うって……？」
シリルの腕を掴んだまま、ぐいぐいと街道の脇へ引っ張って行こうとする女性に、シリルは慌てて問いかけた。一体、どこに連れて行こうと言うのだろう。何を、手伝えと？
途端、女性がものすごい勢いで振り返った。その彼女の、あまりにもの凄い形相に、一瞬、凍り付く。まるで、ひどく聞き分けの悪い子供に、癇癪を起こす寸前の母親のような。
「いいから、黙って付いて来る！」
「は、はいっ」
ひどく理不尽な言葉を、恐ろしい剣幕と共に投げつけられて。シリルは思わず、反射的に頷いてしまっていた。
「空に出るよ」

そう耳元で囁かれた、次の瞬間。シリルは足下から地面の感覚が失われたことに気付いた。けれど、慌てることはない。この魔法の構成は、シリルもよく知っている。空間転移の呪文。更に次の瞬間、空中に放り出された時は――前もって警告されていたのにも関わらず――さすがに少し驚いたけれど。即座に呪文を唱え、魔法の翼を背に広げる。

その女性が魔法使いであることは、彼女が自分に触れた時に気が付いた。正確には、その纏う魔力に。

ばさり、と翼を羽ばたかせて身体の向きを変える。自分をここに連れてきた女性と肩を並べたシリルは、目の前に広がる光景に言葉を失った。と同時に、何を手伝わなくてはならないのかを理解する。

果てがないほどにどこまでも広がる、大きな森。その端の一角に、禍々しく光る赤い色と、燻る黒い色が見える。それは森の大きさからすればほんの一部分でしかないけれど、それでも立ち上がった火柱は人ならば十人は軽く呑み込めるだろう。ゴウゴウと音を立て、風に乗って渦巻き、燃え上がる炎に包まれた秋の色の木立が、声にならない悲鳴を上げている。

「水を……！」

「無駄だよ」

慌てて水を呼ぼうとしたシリルを、けれど冷静な声が制した。女性の表情は、先程までとは打って変わって落ち着いている。炎の狼藉を目の当たりにしたことで、かえって動揺が鎮まったらしい。

「多少の水じゃ、焼け石に水だ。雨を呼ぶよ」

「雨を……？」

女性の言葉に、シリルは目を見開いた。あるはずのない雲を作り、雨を呼ぶ。そういった魔法が、ないわけではない。けれどそれは本来、ひどく大がかりなものだ。例えば、魔法使いが十人以上集まって、長々しい儀式と共に行うような。

「本気ですか？」

言いながら、シリルは思わず周囲を見回した。もしかして、自分たち以外にも魔法使いが集まっているのかもしれない、と思ったからだ。けれどその期待はあっさりと裏切られた。辺りには、魔法使いどころか自分たち以外に人っ子一人見えない。

「こんな時に、冗談が言えるかい」

そう言った彼女の表情は、真剣そのものだ。悲壮なほどの決意を込めたその声が、この森が彼女にとってひどく重要なものであることを示している。

シリルはもう一度、燃え上がる炎を見下ろした。今はまだ、その炎は森のごく一部しか浸食していない。けれど、広がるのは時間の問題だ。良く晴れた、風のある乾いた日が続くこの季節の気候と、燃える材料には事欠かない、森林という土地。このまま放っておいたら、きっと森の大半を燃やし尽くすまで、炎の勢いが衰えることはないだろう。

シリルは、大きく息を吸った。それから、ゆっくりと吐き出す。雨呼びの魔法は、決して二人きりで行うような魔法ではない。それは、この魔法が多くの魔力を必要とするからだ。桁外れに必要とされる膨大な魔力をまかなうために、多くの魔法使いの協力が必要となる。

だが、今回、雨を降らさなくてはいけない範囲は限られている。炎の勢力はまだ、そう大きくはないから。それに。自分は

確か、ずば抜けて強大な魔力を持って生まれてきたのではなかったか？

「分かりました」

そう言ったシリルに、隣に立つ女性は一瞬、驚いたように顔を上げた。けれど、すぐに顔を引き戻す。左手に持った杖は、魔法の構成を補助するための構え。

朗々と始まった呪文に、シリルが声を合わせた。旋律は共鳴し、共振する。女性が構成していく魔法に、シリルの魔力が加わり、その力を増幅する。

程なく、澄み切った空に湿った風が混じり始めた。その風に連れて、炎もいっそう渦巻く。けれどその遠い上空では、確実に厚い雲がその形を整えつつあった。最初は、ほんの小さな塊。だがその濃い灰色の塊は、見る見る内に膨れあがる。ゴロゴロと恐ろしげな音が鳴り始め、その一角が、時折ピカリと光った。

充分に広がった雲から、まだ雨は落ちない。けれどそれも、もう間もなくのはずだ。シリルは、気を抜かずに呪文を続けた。シリルの隣で呪文を唱える女性が、ひときわ高らかに最後の一節を口にする。途端、目を眩ませる閃光と耳をつんざく轟音が、暗い色の雲からとどろいた。

直後。

ポツリ、と落ちた雨は次第に勢いを増し、辺りは一面、激しい雨に覆われていった。

シリルは女性に導かれるまま、森の端の地面に降り立った。まるで滝のような雨に打たれて、髪も衣服もポタポタと水を滴らせ、ぐっしょりと重い。地面を足の裏に感じた途端、思い出したような寒気に襲われて、シリルはぶるっと身体を震わせた。いくら天気が良いとは言え、この頃はもう、気温もそう上がらない。このままにしておくと、遠からず風邪を引いてしまいそうだ。

「ほら、こっちだよ」

女性に手招きされて、シリルは初めてそこに一件の小さな庵があることに気がついた。森のすぐ傍に建てられたその庵は、森の色と同じ緑と茶色の色で構成されており、一瞬、目に付かなかったのだ。この辺りには炎の魔の手は伸びなかったらしく、小屋もその周辺も秋の木の葉の色に美しく彩られている。

「さあ、入りな。何もないけど、服を乾かして身体を温めるくらいのことは出来るからさ」

そう言われて、シリルは今更遠慮などしなかった。ポタポタと水を垂らしながら人の家に入るなんて、申し訳ないとは思ったけれど、そんなことを言っていたら、確実に風邪を引く。それにそもそも、こうなってしまったのは彼女のせいだ。

彼女の庵に入って一時間後には、シリルは濡れたマントをその壁に掛け、冷え切った身体を毛布にくるんで、明るく燃える暖炉の傍でジンと様々なスパイスが入った温かい飲み物を口にしていた。庵の中は整然と片付いているわけではなかったが、どこか温かく、そして底抜けに明るい。それは何だかこの庵の主の持つ雰囲気とよく似ていた。

「えぇと。そろそろ、お話を聞かせていただいても良いですか？」

乾いた服に着替えた女性が、自分と同じようにジンで出来た飲み物を持って暖炉の傍に座ったのを見て、シリルはようやく、

そう問いかけた。何しろ、この庵に入ってから今まで、この女性はめまぐるしく動き回り、シリルの世話を焼いたかと思うと、息つく間もなく自分の荷物を片付け、全く口を挟む余地すらなかったのだ。

「ああ、いいよ。すまないね、急に巻き込んで。困ってたとこに、馬鹿でかい魔力がこっちに向かってるのを感じたからさ。あたしは、リタって言うんだ」

「私はシリルです。お世話になってます」

ようやく名乗ってくれた女性に、名乗りを返す。

「シリルか。助かったよ、ありがとう。私だけじゃ、あの火は消せなかったかもしれない」

そう言ってにっこりと笑ったリタには、悪びれる様子はない。けれどその言葉と表情に込められた、紛れもない感謝の気持ちに気付いて、シリルは苦笑した。

「お役に立てて良かったです」

そんな風に、まるっきり素直にお礼を言われてしまうと、シリルもこう答えるより他にない。

「あんたさ、『恵みの森』って、聞いたことはないかい？」

手に持ったカップから温かい飲み物をごくん、と一口飲み下して。それからリタが口にしたのは、あまりに有名な地名だった。

恵みの森は、ルチアの西南、ツェリアとの国境に広がる、広大な森林地帯だ。この森から流れ出るオルティア河は、綺麗で美味しい水と畑仕事に最適な肥沃な土を運んでくる。河が運ぶ恵みは全て森からの贈り物であることから、ルチアの人々は、この森を恵みの森と呼ぶのだという。

シリルは、その一帯を炎に侵されそうになっていた広大な森林を、再び思い浮かべた。考えてみれば、あれほどに大きな森は、そう多くない。

「ここは、恵みの森なんですね？」

そう言って首を傾げたシリルに、頷きを返して。それからリタは、カップの中の飲み物をもう一口飲み下すと、言葉を続けた。

「でも、あんたはきっと知らないだろう。昔、あたしのばあちゃんがまだ若かった頃、ここはそんな風に呼ばれてなかった。この辺には森どころか、木の一本だって生えちゃいなかったんだ」

「え？　そうなんですか？」

リタの言葉に、シリルは驚いて問い直した。だって、もしもそうだというなら、あの広大な森がたった五、六十年足らずで出来上がったということになる。でもそんなことは、まずあり得ないことだ。上空からちら、と見ただけでも、明らかにそれ以上生きているはずの太い木々がたくさんあるのが見て取れたのだから。

そう言ったシリルに、けれど、リタはくすくすと笑ってみせた。

「あたしは、この森の守り人なんだよ。あたしのおばさんも、あたしのばあちゃんも、そうだったんだけどね」

「豊穣の魔法を知らない訳じゃないだろう？」と逆に問い返されて、ようやく合点がいく。植物の生長を促進し、活力を与える魔法。その魔法を絶えず使い続ければ、五、六十年で、このくらい広大な森を作り出せるかもしれない。それはすなわち、

守り人達は皆、魔法使いだった、ということだけれど。
　そこまで考えて、シリルはこの森に関するもう一つの話を思い出した。恵みの森と呼ばれ、ルチアの農民達から惜しみない感謝を受けているこの森に、けれど、深く分け入ろうという人間は、まず居ない。その森の奥に入ろうとした人間は、必ず道に迷うことになると言われているからだ。真っ直ぐに進んでいるつもりが、いつの間にか同じ所をぐるぐると回っていたり、来た道を逆に辿っていたりして、決して森の奥に辿り着くことは出来ないのだと言う。だが、これまでシリルは、その話を本気にしてはいなかった。暗く見通しのきかない森の中で、方角を見失うというのはよくあることだ。けれど。
「もしかして、この森に入ると必ず迷うって言うのも、あなた達が？」
　代々の守り人が、魔法を使って人々を遠ざけてきたというのなら、あながち、あてにならない噂というわけでもなかったのかもしれない。
「ああ、そうだよ。なんだ、よく知ってるじゃないか」
　シリルの疑問を、リタはあっさりと肯定した。
「昔、あたしのばあちゃんが若かった頃、ここには木の一本も生えていなかった。オルティア河は好きなときに氾濫し、人々の村や町を何度も沈めた。でもね、それよりずっと前――あたしのばあちゃんの、更にばあちゃんの時代。この辺りに、人が住み始める前には、ここはやっぱり、豊かな森だったんだよ」
　そう言って、リタはほう、と息を吐いた。それから、どこか遠くを見るような表情で言葉を続ける。
「人は、豊かなものを見ればその豊かさを分けて欲しい、と思うもんだ。それがいけないってわけじゃない。でも、どんなに豊かな森にだって、限界はある。そして人は、それに気付かない……まあ、ばあちゃんの受け売りだけど」
　ひょい、と肩を竦めたリタを見て、シリルもまた、ほう、と息を吐いた。彼女の言いたいことは、何となく分かる気がする。
　森の豊かさを分けてもらおうと、森の中に踏み入った人々は、自分の行為がいつか森を滅ぼすことになるなんて、思いもしなかっただろう。受け取ることに慣れた人々は、いつしか限界以上の豊かさを森から搾取し始め、最後には豊かな森を不毛の地へと変えてしまった。必要以上に森を侵すことなく、与えられた分だけで満足していれば、オルティア河はいつまでも、その恵みを届けてくれたはずなのに。
「実際、あたしが守り人になってからまだ二十年だけど、それまでにこの森に入ろうとした人は決して少なくない。もちろん、その全てが悪さをするために入り込んだとは思わないけどね。時にはこうやって、いたずら半分に火をつけたりする奴もいる。それが、どんな結果をもたらすことになるのか、知らないんだ」
　最後は、まるで独り言のように。そう呟いたリタの表情に、シリルは唇を噛んだ。二十年もの間、一人で森を守ってきた彼女。そんな孤独の中で、何も知らない人々を惑わせ、遠ざけることが、楽しいはずもないのに。
「さすがに、今回はちょっとやばかったね。あんたのお陰で助かったよ」
　それでも、明るい口調でそう言い足したリタに、どう答えて良いのか分からなくて。シリルはただ、曖昧に笑って見せた。

陽が中天を超え、西に傾き始める頃には、シリルの髪もマントも、もうすっかり乾いていた。服もすべてが気持ちよく乾くというわけにはいかなかったけれど、とりあえず、もう風邪を引くことはないだろう。

「あの、リタさん。この恵みの森、ツェリアの方では何と呼ばれているか、ご存知ですか？」

リタの用意してくれた昼食のライ麦パンを、密漬けにした黒苺のジュースと一緒に飲み込んで、それからシリルはリタにそう問いかけた。

「ああ、『迷いの森』だろ」

間髪入れず、リタが答える。立ち入ると必ず道に迷う、迷いの森。森の中で生まれるオルティア河はルチア側に下っており、その恵みはツェリア側には届かないから。

「それが、どうかしたかい？」

反対に問い返されて、シリルはふ、と短く息を吐く。

「その森、私の故郷のすぐ近くなんです」

シリルの故郷、ニールの裏手に広がっていた、深い森。その森のことを、人々は迷いの森と呼んでいた。

ニールは、ツェリアの国内でも一、二を争う辺境の田舎村だ。人々の魔法に対する偏見は、かなり根強い。もっともそのお陰で、あの村の人達は滅多に迷いの森に足を踏み入れたりしないだろう。けれど。

それでも、そんなことが全くない訳じゃない。探検を夢見る子供達、開発を夢見る大人達――森に踏み込んだ者が居たからこそ、迷いの森という名前が付けられたのだ。その内誰かが、今回と同じように火をつけようと考えるかもしれない。その時、まるきり反対側に住んでいるリタに、この森を守ることが出来るだろうか？

「それで？」

むす、とした表情で聞き返したリタの視線を、真正面から受け止める。それから、シリルはにこり、と笑って見せた。

「私も、庵を建てようと思います。私の故郷の、ニールの近くの森の傍に」

シリルが、そう言った途端。リタはシリルの顔をぽかん、と見上げると、まじまじとシリルの顔を見つめた。そのまま、しばらく沈黙が続く。穴が空くほどに見つめられて、シリルは気まずさに少し身じろぎした。

「……えぇと。ダメ、ですか？」

次第に弱気になったシリルの表情から、少しずつ笑顔が消える。半ば以上笑顔の消えた情けない表情で、シリルが首を傾げた、その直後。

「そんな訳ないよ。すっごい助かる！」

答えたリタの、あまりの大声に、シリルは思わず飛び上がった。同時に、まるで呪縛が解けたかのように満面の笑顔になったリタを見て、ほっとする。

自分がするべき研究は、きっと、どこに居ても出来ること。それなのに、これからどこに戻るべきなのか決められなかったのは、多分、居るべき場所が分からなかったから。一人前と言いつつ、何の役にも立てない自分が、何だか中途半端なように思えて。

「私には、森の守り人なんて出来ませんけど。でも、この森を守るために、やれる限りのことをしたいと思ってますから。何

かあったら、すぐに呼んで下さい」
「よぉし、約束だよ！　頼りにしてっからねっ」
　にこにこと、本当に嬉しそうにそう言うリタに、シリルもまた、満面の笑みで頷いた。

　――シリルの奴が今、こうしてここに庵を結んでおるのは、こういう訳があったのじゃよ。
　魔法、というのは目立つ存在じゃ。何故ならば、魔法というのはそれを使えん者にとっては得体が知れず、そしてそれ故にその力を――期待されるにせよ嫌悪されるにせよ――過大評価されがちじゃからな。レグルの魔法使い達はそれを危惧して力を見せんように、と言うが、隠せば隠すほど、人はその神秘に心惹かれてしまうのもまた事実じゃ。かつて、幼い頃のシリルがそうであったようにの。
　じゃがその一方で、魔法の力をこういう風に使う者もおる。人知れずひっそりと、誰に感謝されることもなく、持てる力を人々のために使う者もな。いや、何も華々しく活躍する魔法使いを否定する訳じゃない。自分の力を使ったなら、何らかの代価、もしくはせめてもの感謝を要求することは、至極当然のことじゃろう。ただ、魔法は目立つものとは言え、目立つことを本当に厭うのであれば、こうしたやり方も評価せねばならんと思うがの。
　――ふう。少し喋り疲れたわい。今日はここまでにさせてもらおうかの。

# 第十二章　杖にこめられた〔前〕

そういえば、杖の話をまだしたことはなかったかの？　ああ、そこに放り出してある、薄汚れた古い杖のことじゃ。

魔法使いにとって、杖の存在は必須というわけじゃない。持っている魔力を増幅させてくれる杖は、魔法使い見習いや魔力の少ない魔法使いにとっては、大いに役に立つ物ではあるがの。シリルも、見習いの頃は随分とその杖に頼っておったもんじゃ。

じゃが、今のシリルがその杖を使うことはほとんどない。シリルはもう見習いではないし、奴の魔力は人並み外れて強大じゃ。それでも、シリルの奴はその杖を手放そうとはせん。師匠のケヴィンからもらった物じゃ、ということもあるが……奴にとって、その杖は特別なのじゃよ。

これから、その話をしてやろう。シリルが、師匠の元から旅立つきっかけとなった話じゃ――。

――ぴちゃん。

深い、闇。鼻の先に持っていった掌さえ見えないほどの暗闇の中、水音が反響する。

――ぴちゃん、ぴちゃん。

一定の間隔を保って鳴る、細い水音。微かな雫が断続的に硬い石の上に落ちているのだ、ということは、見えなくても容易に想像が付いた。

澱んだ空気がゆるゆると揺れて、生ぬるく皮膚にまとわりつく。饐えたような、腐臭にも似た有機的な悪臭。鼻腔に届いたその感覚に、シリルは知らず、眉を顰める。

ふと。その空気の中に僅かな違和感を覚えて、シリルは己の感覚を研ぎ澄ました。闇の、奥。暗闇以外には何も見えないその空間から、明らかに異質な気配が漂ってくる。

「タ、ス、ケ、テ」

不意に耳朶を打った声に、シリルはびくり、と身体を震わせた。ひどく、遠い――けれど、すぐ耳元で囁かれたかのように息づかいさえはっきりと聞き取れる、掠れた声。

「誰？」

呼びかけると同時に、シリルは周囲をぐるりと見回した。人の姿は、ない。あまりに濃い闇に遮られてしまっているためか、それとも。

「タ――スケ、テ――」

声は呼びかけに答えることなく、途切れがちに同じ言葉を繰り返す。シリルは、目を眇めて暗闇の奥を見やった。どこからとも知れぬ声。けれどシリルは、その声の主がそちらにいることを、何故か確信していた。だが、いくら目に力を入れても、闇を見通すことは出来ない。

「タスケ――」

耳朶を震わせる声が、力尽きたように途切れる。そのことが示すであろう事実に気付いて、シリルは戦慄に身体を震わせた。

がばり、と身を起こす。息が荒い。べったりと汗で濡れていることに気付いて、シリルは袖口で額を拭った。窓から差す光

は、弱く冷たい。まだ、夜が明けていないのだ。
「夢……？」
ひどく、リアルな。皮膚にまとわりつく、湿った空気も。耳朶を打つ、掠れた声も。
――声？
思い出すと同時に、気付く。濃く漂う、夢と魔力の残滓。これは。
――夢渡り！
夢を使って、他者にメッセージを伝える魔法。凶兆の印象が強いのは、多くの場合、悲惨な未来の予測を伝える手段として用いられてきたからか、それとも、そういった手段でしかメッセージを伝えられない羽目に陥った魔法使いが、たいてい悲惨な最期を遂げたからか。
シリルは慌ててベッドを降りた。奇妙な途切れ方をしたその声に、不吉な予感が背筋を昇る。考えるまでもない、誰かからの緊急通信。そんな日に限って、師のケヴィンは旅の空だ。
手早く服を身につけ、不安を振り払うように杖を強く握る。ケヴィンが、一番最初に買ってくれたその杖の力を、実際に使う機会なんて滅多にないけれど。それでも、持っているだけで自分の力以上の力を発揮できるような気がするから。
多分夢の主は、この家の主であるケヴィンに助けを求めるつもりだったのだろう。けれど今、ケヴィンはこの家には居ない。まだ半人前の自分では力不足かもしれない、とも思うけれど。他に、助けられる人が居ないというのなら。見殺しにするなんて、出来るわけない。
「待ってて下さい――必ず、助けます！」
ばさり、とマントを翻して。シリルは新月の夜に飛び出した。
夢の中の光景に、手がかりと呼べる物はそれ程多くない。深い闇、断続的な微かな水音、有機物の放つ悪臭、まとわりつく湿気を含んだ重い空気――。だが、夢の主は助けを呼んでいた。ならばきっと、それほど遠い場所ではないだろう。せいぜいレグルの街の中か、あるいはその近辺。その辺りで、条件を満たす場所と言えば。
「ここ、だと思うんだけど」
錆び付いた鉄格子を見やって、シリルはぽつりと呟いた。町の外れにある、地下水道への入り口。はめられた鉄格子は、子供が誤って入り込まないようにするための用心であり、少なくともこの十年は動かされた形跡はない。
数秒だけ、考えて。それからシリルはぶるん、と首を振った。微かな星明かりの下、薄い色の金の髪が揺れる。
この奥から感じられる魔力の残滓は、間違いなくあの夢のものだと思うのだけれど。もしかして、何か大きな勘違いをしているのだろうか？　でも、たとえそうだとしても、時間がないことは夢の様子からも明白で。他にあてなどない上に、間違っているかどうか、確認する術だってないのだから。
闇夜にも暗く沈む格子の向こうに、ちらりと目をやって。肩から思い切りぶつかってみれば、腐食した鉄格子は簡単に外れ、鉄臭い埃を宵闇の中に舞い上げた。
湿った空気の中に、ひたひたと足音が響く。ランタンの明かりに照らし出された不気味な光景に、シリルは知らず、足を早

めた。レグルの街の地下を、縦横に走っている地下水路。これまでその中に入り込んだことなどなかったが、それでも目指す場所への進路に迷うことはなかった。夢の中で感じたのと同じ、魔力の残滓。それはシリルが一歩を踏み出すごとに、確実に強くなっている。

バシャン。

何か大きな物が水の中に落ちるような音に、シリルはびくり、として振り返った。水路に広がる、得体の知れない波紋。凍り付いたように固まったまま、波紋がそれきり落ち着くのを確認して、ほう、と息を吐く。

この水路には、どのくらい人の手が入っているのだろう。今でも生活の中で使われている水路なのだから、まるきり放置されているわけでもないのだろうけれど。闇の中を駆け回る不潔な小動物や、水路の中を泳ぐ得体の知れない生物を見ると、それほど頻繁に手入れされているわけではなさそうだ。

気を取り直して、再び足を速める。急がなければ、という焦りと、得体の知れない場所に対する警戒。ランタンを握る手の平が、汗でべっとりと濡れて気持ち悪い。

ふと。シリルは奇妙なことに気付いて足を止めた。濡れた石床を駆け回る、小動物の足音。水路の中で、水棲生物が蠢く音。先程まで不気味に響いていたそれらの音が、今は全く聞こえない。

ランタンを掲げ、辺りを見回す。見通しの利かない、深い闇。水路を流れる水が、揺れる炎の光を反射して粘ったように光る。湿った石床の水溜まり、壁からしたたり落ちる得体の知れない液体。そして。

何もないはずの虚空でキラリと反射する何かに気付いて、シリルは眉根を寄せた。直後、その正体に気付いて息を呑む。不安定なランタンの灯を反射する一対の光が宿しているのは、血に飢えた野獣が孕む、獰猛な狂気。

――山犬……？

レグルの周囲に、本来、山犬は生息していない。ましてや、何故地下水路に？　獰猛な野獣とはいえ、湿った暗い場所を好むような動物ではない。

咄嗟に思い浮かんだのは、以前の出来事。使い魔として、使い捨てられた何匹もの山犬たち。こいつらも、誰かとの契約に縛られているのだろうか。だが、それにしても。

いつの間にか周囲を取り囲んでいる野獣たちの息づかいに、シリルは身を固くした。ランタンの明かりを映して光る目は、一匹や二匹のものではない。十匹……いや、二十匹は下らないだろう。使い魔との契約は、血の契約。どんな魔法使いであっても、同時にこれほど多くの使い魔と同時に契約することなど出来るものだろうか？

ジリッ。

湿気た床が、耳障りな音を立てる。足並みを揃えて近付いてくる山犬たちを目にして、シリルは思考を打ち切った。今は、考えている場合じゃない。夢の主は、前方を塞ぐ獣たちの向こうに居る。早く、助けなくては――手遅れになる前に。

短く呪文を唱えるのと同時に、左手の上に魔力を集中させ、練り上げる。周囲を取り囲む数十匹もの猛獣たちを、一匹一匹相手にしている時間はない。

徐々に包囲の輪を狭める獣たちを、シリルは無言で見守った。

山犬たちの目に血走る狂気は、けれど、間違いなく彼ら自身の物で。操られているのか、契約に縛られているのか――それを哀れに思わないわけではないけれど、今、護るべきは彼らではないから。

練り上げられた魔力は、爆発性の威力を伴って凝縮する。狭い水路を、あまり壊したくはない。

野獣たちのリーダーだろうか、ひときわ大きな灰色の毛皮を持つ山犬の口から漏れる恐ろしげな唸り声を聞きながら、シリルは随分と落ち着いている自分に気付いていた。そう、怯える必要も、慌てる必要もない。するべきことは、決まっているのだから。

大きな体を持つ灰色の山犬が、身を低く保ちながら強靭そうな四肢を曲げる。今にも飛びかからんばかりのその姿勢に、他の山犬たちも次々と追随するのを見て、シリルは冷静に二つめの呪文を唱えた。唱うような旋律が、闇に響く。次の、瞬間。

数十匹を超える山犬の群れが、一点に向かって飛びかかるのと。

シリルが宙に飛び上がったのは、同時。

互いにぶつかり合い、獲物を見失って戸惑う獣たちを見下ろして、シリルは躊躇うことなく、左手を振り下ろした。

爆発性の魔力の塊が、一ヵ所に集いひしめく獣たちの真ん中に投下される。一瞬遅れて鳴り響く、轟音。

吹きすさぶ爆風に煽られるマントを片手で押さえながら、シリルは反響する爆音に顔を顰めた。宙に浮かんだまま、足元に広がる凄惨な光景に眉根を寄せる。

狭い通路いっぱいに散らばった赤黒い肉片は、壁の半ばにまで飛び散って、吐き気を催す壁画を描いている。赤く染まった水路。これまで漂っていた悪臭とは明らかに異なる、濃い血の匂い。――視界の中、生きて動く物の姿は、ない。

それを確認して、シリルはそのまま身体の向きを変えた。魔力の残滓を辿り、素早く奥に進む。

突き当たりを左に逸れた、すぐの壁際。窪んだ壁に身を埋めるようにして蹲っている男を見つけて、シリルは慌てて降り立った。弱々しい魔力は、確かにあの夢渡りと同じものだ。

安堵の息を吐こうとしたシリルは、けれどその直後、嫌な可能性に思い当たってゾッとした。至近距離からランタンで照らされても、男はピクリとも動かない。慌てて手首を取り、脈を確かめる。それから、シリルは今度こそ、ほう、と息を吐いた。

「良かった……」

弱々しい脈は、それでも、確かな命の証。

ランタンを左手に持ち直し、男の身体を右側に抱えると、シリルはもう一度呪文を唱えた。魔法の翼をばさり、と羽ばたかせ、宙に浮く。人一人を引きずって、あの血の海を歩いて渡る気にはなれない。

決して小柄ではないその男は、けれど、不気味なほどに軽くて。そのことが、シリルの内に奇妙な不安を掻き立てた。

ガチャリ、とドアノブが立てた音に、反射的に振り返って。部屋に入ってきた人物を見て、シリルは思わず立ち上がった。

「先生！」

旅に出ていた師、ケヴィンの温かい風貌を目にして、ホッとすると同時に首を傾げる。まだ、あとひと月は戻らない予定だ

ったと思うのだけれど。
「先生、どうしてここに？　もしかして」
僕のせいですか？　と訊ねようとして、当のケヴィンに遮られる。
「よう、ただいま。シリル、大活躍だったみたいだな？」
茶化すような言葉にムッとしてケヴィンを見上げたシリルは、けれど、師の瞳に裏のない賞賛を見出して反論を引っ込めた。代わりに、はあ、と溜息を吐く。
活躍――と、言えるのだろうか。あの、闇に満ちた夜。地下水路から助け出した男は随分と衰弱していたが、それでも何とか命だけは取り留めたと言う。だが心神喪失状態が続いており、何故あんな場所にあんな状態で倒れていたのか、どんな意図を持って夢渡りを行ったのか、その理由は何一つ明らかになっていない。
だが、そんなことより何より。
あの日。ようやくの思いで地下水路から抜け出し、評議会が管理している緊急施療院に男を運び込んだシリルは、自分が救ったその男が魔法評議会の副議長、リオン師であることを知らされて目を見開いた。気付かなかったのは、無理もない。副議長の顔を見たことがないわけではなかったが、それほど間近で見た覚えがあるわけでもないし、その上どんなひどい目に遭ったのか、彼の面差しは以前とはかなり変わっていたから。
夜が明けるのを待つよりも早く、リオン師の身に起きた異変は評議会の面々に知らされた。リオン師の身柄は施療院から評議会の会堂に移され、その日から早一週間、その同じ会堂の会議場で、評議員達の緊急会議が延々続けられている。仮にもレグルの魔法使いを代表する者が、明らかに尋常ではない事態に陥り、倒れたのだ。事態は、容易に収拾が着きそうもない。
――何が、あったのだろう。そして……これから、どうなってしまうのだろう？
今回の事件に関して自分がしたことは、結局大した役には立っていない、とシリルは思う。リオン師は未だ回復していないし、評議会は混乱したままだ。リオン師の身に何があったのか分からない以上、今回のことがこれで終わりなのかどうかも分からない。
黙り込んでしまったシリルに、ケヴィンは何も言わなかった。ぽん、と肩を叩き、軽い口調で告げる。
「さて、行くか」
師の顔を見上げたシリルは、そこにいつも通りのケヴィンの顔を見出して、ほっと息を吐いた。そう……無闇に不安がっていても、仕方ない。それに、自分はただの半人前の魔法使いで。レグルを背負って立っているわけではないのだ。
「はい」
素直に頷き、師に続いて部屋を出る。シリルの背後で、ドアがやけに乾いた音を立てて閉まった。

# 第十二章　杖にこめられた〔後〕

シリルは目の前にそびえる重そうな木造の扉を見上げ、次いで師の顔を見やった。

会堂の中心に位置する、評議会の本会議場。扉の向こうでは、お偉い評議員達がリオン師の事件について会議を行っているはずだ。

リオン師の件で訊ねたいことがあると言われ、呼び出しを受けたのが昨日の晩。言えることは全て言ったし、今更改めて言うことなどないのに、とも思ったけれど。師まで共に呼び出されたとなれば、本来の用はそれではないのかもしれない。ケヴィンは確かにシリルの師ではあるけれど保護者ではないし、彼はあの晩、この町には居なかったのだから。

ケヴィンの表情は、あくまで普段通りだ。彼は、知っているのだろうか。今からここで、何が話されるのかを。

重い扉が、内側に開かれる。円形の会議室と、その中央へ真っ直ぐに続く通路。それを目の当たりにして、シリルはもう一度師の顔を見やった。無言で背を押され、足を踏み出す。

通路を一歩進むたび、周囲から突き刺さる視線。円を描くように配置された座席に座っているのは、全て評議員だろうか。その数は、決して多くはない。十人にも満たない人数だと思うのに、圧迫感のある雰囲気に、首筋が強ばる。ようやく中央の壇上にたどり着いた時、シリルは奇妙な疲労感に襲われてぐったりとしていた。

「ようこそ、シリル」

いきなり、目の前に座っている老人に話しかけられて、シリルは驚いてそちらへ目を向けた。てっきり、ケヴィンから先に話をするものだと思っていたのだ。慌てて背筋を伸ばし、一礼する。

「は、初めまして」

老人はシリルの挨拶に、厳格な表情を崩すことなく、鷹揚に頷いてみせた。

「儂の名はエセル。評議会の議長を務めておる」

「はい。存じ上げてます」

事実、評議長のエセル師の名前は有名だ。並外れた力を持つ魔法使いとしても、誰よりも厳格で規律を重んじる、頑固な評議長としても。

「ここに呼び出された理由は、聞いているな？」

「リオン師の件で、訊ねたいことがある、と伺いました」

シリルの言葉に、エセル師は再び頷いた。彼が頷くたび、顔の下半分が豊かに生えた真っ白な髭に埋もれる。

「そうじゃ。訊ねたいこと、というよりは確認じゃな。今から、そなたに一つ質問をする。嘘偽りなく、答えるように」

エセル師の言い様に、シリルはムッとするのを押さえられなかった。一体、どんな嘘をつく必要があるというのだろう？

「嘘なんて言いません」

「では、訊ねます」

いきり立つシリルを遮るように、立ち上がってそう言ったのは、エセル師の二つ右に座っていた女性だった。彼女もまた、評議員の一人だろう。穏やかな視線で諭すように見つめられ、

口にしようとしていた反論を飲み込む。
「一週間前の深夜、あなたはリオン師から夢渡りで伝言を受け取り、単身救助に入った地下水路でリオン師を発見、施療院に届けた。その際、地下水路内で攻撃を仕掛けてきた野獣数十匹を魔法を使って退けた。――間違いありませんね？」
「はい。間違いありません」
女性評議員の言葉に、シリルはそう答えて頷いた。同時に、心の中で眉を顰める。確かに、間違いはない。だがそれ以前に、こうして呼び出されてまで、真偽を問われる内容とも思えない。いくらレグルの評議会が魔法の安易な使用を戒めているからといって、まさかあの状況で、魔法の使用が問題になるわけもないだろう。
「それが一体――」
訊ねようと口を開いたところで、シリルはエセル師が鋭い眼光を自分に向けているのに気付いて口を噤んだ。再び、エセル師が口を開く。
「シリル。そなたも聞いているかもしれないが、リオン師の状態は芳しくない。いや、むしろはっきりと悪い」
エセル師の言葉に、シリルは驚いて目を見張った。確かに、そのことは噂で聞いているし、助けた時の状態からも充分に想像出来ることだ。けれど、たとえそうであっても、評議会の重要なメンバーがそんな状態であることを、評議長のエセル師自身が口にするなんて。それはつまり。
「リオン師は、助からないんですか？」
ボロ布のように蹲っていた、その姿が脳裏に蘇る。夢の中で聞いた、掠れた声。抱えた時の、不安なほどの軽さ。それほど、関わりのあった人ではないけれど。何があったのか、どんな理由でそんな目に遭ったのか――何一つ、分からないまま？
「いや、命は取り留めるじゃろう。だが、彼の心は壊れてしまった……」
そう言って目を閉じたエセル師の表情に、深い苦悩と悲哀が浮かんでいることに気付いて、シリルは唇を噛んだ。エセル師にとって、リオン師は深い関わりのある人なのだ。自分なんて、比べものにならないほどに。
「もう少し、早く助け出せていれば――」
そうしたら、心も救えていただろうか？　あの時は、あれが精一杯だった、と。そう分かっていて、それでも、思わずにはいられない。
それと同時に、心に湧く、恐怖の影。
副議長ともなれば、充分に修行を積んだ、力の強い魔法使いだったはずなのに。心が壊れるなんて、一体、どんな酷い目に遭ったのだろう？　心の傷を癒す魔法だって存在するのに。それすら役に立たないほど、傷つけられるなんて。
「そなたのせいではない。他の誰も、あれが助けを求めていることにすら、気付かなかったのじゃからな」
目を閉じたまま、そう言って頭を振る。
それから再びシリルに目を向けたエセル師は、既に厳格な評議長としての顔を取り戻していた。淡々と言葉を続ける。
「ともあれ、今のリオン師に副議長は務まらん。そこで、儂らは新たな副議長を選出するつもりでおるのじゃが――」
エセル師はそこまで言うと、意味ありげに言葉を切った。その視線がちらり、と自分の背後に向けられたのに気付いて、シ

リルは思わず振り返る。そこに立っているのは、師のケヴィンだ。まさか――まさか？

「その者は、現在別の仕事に就いておって、あちこちの国を渡り歩いておるのじゃ。その仕事を、放り出すわけにはいかん。と言って、副議長の職と両立できるものではない。そこで儂らとしては、その者がやっておった仕事を力ある者に引き継いでもらい、その者に副議長を引き受けてもらいたいと考えたわけじゃ」

続くエセル師の言葉を背中で聞きながら、シリルは師の顔を真っ直ぐに見上げた。評議長の、意味深な発言。それより何より、師の苦笑をかみ殺したような表情に、確信する。

「……先生？」

「なんだ？」

この期に及んで、しれっと答える彼の表情が憎らしい。だって、聞いてない。ケヴィンが、評議会のメンバーであることも、あちこちの国を渡り歩いていたのが、評議会の仕事であったことも。

追求しようと口を開いて――シリルはそのまま口を閉じた。はあ、と息を吐く。

そんなこと知らなかった。でもきっと、知っていたって意味はないのだ。頻繁に旅に出、家を留守にしていたケヴィン。その旅の目的を、訊ねたことはない。けれど訊ねたところで、どうせ本当のことを教えてはもらえなかっただろう。評議会の秘密主義は、今に始まった話ではないから。

思い直して、再び口を開く。

「先生が、副議長になるんですか？」

「お前が、俺の代わりにレグルの外の仕事を引き受けてくれるなら、な」

「僕が？」

師の言葉に、シリルはきょとん、として問い返した。同時に、エセル師の言葉が脳裏に蘇る。「仕事を力ある者に引き継いで」――力ある、者？

ようやく、気付く。リオン師を救出した時のことについて訊ねられたのは、自分の手際と力の確認だったということに。

ケヴィンはレグルでも有数の、力の強い魔法使いだ。彼が副議長になるなら、きっとそれに越したことはない。だがその一方で、自分が師の仕事を継ぐということは――それはつまり、ケヴィンが自分のことを一人前の魔法使いとして認めてくれた、ということなのだろうか。自分は、まだまだ半人前のつもりでいたけれど。半人前の魔法使いに、自分の仕事を引き継がせようとする魔法使いなど居はしないから。それは、けれど当然、嬉しいことであるはずなのに。

素直にそれを喜べない自分に、シリルはぎくりとした。ケヴィンの元を離れることを、考えたくないと思っている自分に気付く。最初から、一人前の魔法使いになればレグルを離れるつもりで居たはずなのに。いつしか、そんなことを想像することすらしなくなっていた。この町での、安穏とした生活があまりにも居心地が良くて。この時間が永遠に続けば良いのに、などと。

「僕に――出来るでしょうか？」

ケヴィンの返答は分かっている。それでも訊ねたのは、迷いを断ち切るため。

「大丈夫だ。お前の力は、俺が保証してやる」
そう言って頷いて見せたケヴィンの表情に、嘘がないことを見て取って。それからシリルは、くるりとエセル師の方へ向き直った。
師の元で過ごした時間は、とても楽しくて。その時間と別れてしまうことは、本当に名残惜しいけれど。どれ程名残惜しくても、いつまでもケヴィンの元で安穏としているわけにはいかないのだから。
まさか、こんなきっかけで師の元を離れることになるとは思わなかった。でもそれならいっそ、良い機会にしてしまえば良い。
そう自分に言い聞かせて、顔を上げる。
「分かりました。私が、ケヴィン師の仕事を引き継ぎます」
「そうか。よろしく頼むぞ」
厳格な表情を僅かに弛めてそう言ったエセル師に対し、シリルは静かに一礼した。

東向きの窓から差し込む朝陽に、シリルは目を細めた。
窓の外に吹く乾いた風が、紅葉した木の葉を散らす。もう、随分と秋も深い。窓を開けたシリルは、吹き込んだ冷たい空気にぶるっと身体を震わせた。
つくづく、秋の旅立ちに縁があるのだと思う。五年前、故郷を離れたのも、やっぱり秋も深いこの季節だった。そして、その更に五年前、妖魔の国へ向けて旅立った楽士を見送ったのも。
最初は、その楽士を追うために旅をしていた。彼女が向かった妖魔の国のことを調べるために、魔法使いになろうと決心したのは、旅に出て一年も経たない頃の話。もっとも、魔法使いになった今でも、下級妖魔の一匹にだって出会えたわけではないのだけれど。
――妖魔、か。
舞い落ちる木の葉をぼんやりと目で追いながら、シリルは昨夜ケヴィンから聞いた話を思い出した。
周辺の国々を巡り、レグルを離れた魔法使い達を訪ねる旅の中で、ケヴィンはずっと、気になる噂を追いかけていたのだと言う。――曰く、各地で妖魔を目撃する事件が相次いでいる、と。
多分、その大半は何かの勘違いだろう。妖魔の存在は今や伝説や神話といったものに近く、その実在を信じるなんてバカバカしい、という考え方が一般的だ。事実、妖魔に関する正式な記録は千年以上昔に遡る。
だが、たとえその大半が、何らかの勘違いであったとしても。これまで、そんな噂なんて欠片もなかったのだ。少なくとも、ケヴィンが各地を旅して回り始めた、十数年前頃までは。この十年余りの間に急増した、妖魔実在の噂。そこに、何らかの理由があるはずだ、と考えるのはむしろ自然だろう。
そして、今回の事件。
リオン師はあの日、招かれて隣町に住む魔法使いを訪ねたはずだった。だがその日の夜、リオン師はレグルの地下水路の中でシリルによって発見され――彼を招いたとされる魔法使いには、今に至るまで連絡が取れない。ただ、まことしやかに囁かれる噂によれば、その日、リオン師が訪ねていったその家の周囲で、複数の人々が妖魔を目撃した、という。それもまた、今

のところ根拠のない噂話ではあるが。
そこまで思考を巡らせて、シリルはふう、と息を吐いた。
どちらにしろ、この件に関してはこれ以上調べようがないのだ。リオン師を心神喪失に追いやった出来事が何であるか特定できない以上、無闇に他の地の魔法使いと接触することも危険である可能性が高いとして、レグルを離れた魔法使い達にこちらから特に接触を図ることは禁じられてしまったのだから。
代わりに命じられたのは、妖魔の動向を探ること。あまりに漠然としたこの使命に、具体的な方策は示されていない。示しようがないのだ。目撃されているのが本当に妖魔だったとして――妖魔が何を目的として、どこから現れてきているのかも、分かっていないのだから。
ただ、それはシリル自身が持つ目的にとっても、好都合な使命で。もしかしたら、シリルが魔法使いになった目的を知っているケヴィンが、何か画策したのかもしれない。
「シリル、国境まで乗合馬車に乗るつもりだったら急げ。遅れるぞ」
再びぼんやりと思考を彷徨わせていたシリルは、いきなり顔を覗かせたケヴィンにそう言われて、慌てて窓の外を覗いた。乗合馬車がゆっくりと手前の角を曲がるのを見て、手早く背負い袋の紐を肩にかけ、マントを羽織る。それから机の脇に放り出していた杖を手に取ろうとして、シリルはそれに気がついた。荒削りの木で作られた、杖の先端。そこに琥珀色の透明な石がはめ込まれているのを見て、目を瞠る。昨日まではなかった物だ。
「先生、これ」
驚いて背後の師を振り返ったシリルは、途端、まっすぐにこちらを見つめているケヴィンの視線とぶつかった。その、あまりにも真剣な表情に息を呑む。
「月の石だ。高い魔力増幅機能を持つ。お前には不要かもしれんとも思ったが、もしも妖魔を相手にすることになれば、あった方がマシだろう」
その口調は、いっそ悲痛な程で。シリルはようやく、師が自分のことを心から心配していることに気がついた。安穏としたこれまでの時間を、ケヴィンもまた名残惜しく感じているのだ、と。それが分かって、少し嬉しくなる。妖魔とやり合うことになるだなんて、本気で言っている訳じゃないだろうに。
「無理をするな、とは言わん。だが、元気でやるんだぞ」
そしていつか、ここに帰ってこい――そう言って、いつも通りに笑って見せたケヴィンの気持ちが嬉しくて。だからシリルも、精一杯笑って見せる。
「ありがとうございます。行ってきます！」
改まった挨拶なんてしない。いつか帰ってくるなら、そんなの必要ないはずだから。
玄関を出た所でぺこりと頭を下げて、杖を持った右手を大きく振る。それからシリルは、後ろを振り返ることなく、乗合馬車まで全力で駆けていった。

――まさかあの時は、シリルもケヴィンも、本当に妖魔と闘うことになるとは思ってもおらなんだ。まあ実際、どれほど魔力を増幅させたとしても、シリルごときの魔力では上級妖魔に

太刀打ち出来んかったんじゃがな。
　じゃが、これでこの古ぼけた杖がシリルにとって特別じゃ、と言った意味が分かったじゃろう。この杖は奴にとって、ケヴィンと、そしてレグルで暮らした頃の思い出を象徴する物なんじゃよ。人は誰しも、思い出を大切にしたいと思うものじゃろう？　それが幸せな思い出なら尚更じゃ。思い出だけで生きていけるわけではないが、明日を生きる活力にはなるからのう。
　――ふう。少し喋り疲れたわい。今日はここまでにさせてもらおうかの。